
世界を周るは転生者(チート) i n リリカルなのは

チルノ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

世界を周るは転生者^{チート}inリリカルなのは

【Nコード】

N6384Z

【作者名】

チルノ

【あらすじ】

普通の高校生だった転生生活を強いられた。そんな生活をはじめて600年！桜花君がリリカルな世界に転生、色んな力をこの600年で色んな世界で習得しチート化！
さて、介入を決めた桜花君。どうなるんでしょうね？

勝てるのかな？なのは達。

プロローグ（前書き）

どうもー！はじめまして。

プロローグ

どうも、俺の名前は風華 桜花 現役2年の高校生だぜ！

そんな俺は今、一つの問題に直面している。

それは、ここはどこだ！と言うコトだ

「・・・んゝ、確か俺は学校の帰りに・・・本屋によって・・・立ち読みしてたら・・・！！」

「そうか！俺死んだ！！」

「その通りです！」

「えゝ・・・会話はめんどくさいんで一方的に喋りますよ！」

「貴方は死にまして・・・それは私どものミス、貴方はまだ死ぬべき人ではないのです」

「なので私どもはお詫びとして転生をプレゼントしようと思います
「ちょ・・・話聞いて・・・」！！」

「申し遅れましたが私は、神様です。」

「それで転生の事ですが、貴方は生前、アニメや漫画が大層好きだったようなので様々なアニメの世界に転生してもらうことにしました。」

「それで、アニメの世界と言ってもランダムに送られるのですぐに

死んでしまう可能性もあるわけです。」

「そこで、特典として貴方に二三能力を与える事にしました。」

「与えられる基本能力は、あらゆる力を操る能力です。」

「これは、貴方や貴方の周囲の物のあらゆる力を操ることができません。」

「次に、身体能力の最強化。」

「これは、文字通り貴方の身体能力を他の追随を許さないほどに強化させます。」

「最後に・・・そうですね、可愛い娘に縁があるくらいの恩恵をあげます。」

「まあ？これは縁があるだけで、モテるわけじゃないですけどね！
ざまーみる！」

「まあ、こんなもんですかね。」

「んじゃあ、そろそろ行つて来て下さい！あ、その世界で死ぬか物語を終えることで次の世界に赤ん坊になって転生、またはその世界によつては今の年齢で転生します。世界ごとに得た力や経験は引き継がれるので安心して下さい。容姿については転生ごとに変わりますんでよろしく」

「それじゃ、逝ってらっしゃい！」

パカッ・・・ヒュッ

・・・俺は思った、一方的すぎる神様にただ一言”死ね”と・・・

プロローグ（後書き）

はじまります。

プロローグ2（前書き）

よろしくです。

プロローグ2

え、前回神様から転生生活を贈られた風華桜花です。

現在5つくらい世界をまたいできました。（作者の都合だよ！）

で、現在6つ目（読者のには一つ目だよ！）の世界魔法少女リリカルなのはの世界に送られてきました。

容姿は、9歳になっているようです。

世界をまたいでいく内に能力的にもチートに磨きがかかってきました。ま、それは追々公開していくとして。

「ん、家がな、ホテルに住もうにも金がない、野宿しようにも外寒い。」

どうしよう？

「とりあえず現状確認だね」

えと・・・この町は鳴海市で、此处は多分なのはの小さい時描写された公園だろう・・・

現在の所持品は・・・今着てる服・・・終わり！？・・・ん？手紙？何々・・・

——桜花へ

私は神です。

貴方はリリカルなのはの世界では独り暮らしとなっています。家の地図は入れておきました。

貴方の口座もあります。お金も入れてありますので自由にお使いください。

現在は原作三日前です。

P・S

一応ステータスで魔力EXランクを追加しておきました。
デバイスは・・・作れるでしょ？

・・・・・・・・・・・・・・・・

「ふむ・・・まあ、これだけしてくればいいっしょ。んじゃ家に帰りますか。」

で、今家に到着！

「ん・・・どうしようかな原作介入しようかな・・・でもそろそろ休みたい。」

今は原作に介入するか迷っている。

まあ、今同時進行でデバイス作ってただけどね！
能力フル稼働させた最強デバイスだぜ！

「ん、完成！」

「まあ、巻き込まれた時にしか使わないけど・・・起動！」

『起動完了、マスター承認、風華桜花様。名前を付けてください。』

「んゝゝイカロスでどうよ?」

『承認、現時点を持って私の名前はイカロスです。よろしく願いしますマイマスター—』

「おう、早速だけど。この町全体に存在するロストログア、ジュエルシードを探してくんない?」

『了解です。ちょっとお待ちを・・・完了! 21個のジュエルシードの場所をサーチしました。地図に出します』

すると、イカロスの上にデジタルな画面が現れた。鳴海市の地図の様だ点々と赤い点がある。

「この赤いどこにあんの?」

『はい、現在はまだ発動はしてないようですね。』

「んゝどうしようか? 集めてしっちゃんかめっちゃんかきまわす?」

『いいんじゃないでしょうか? 管理局が慌てふためくところを見るのは楽しそうです。』

こいつ結構なスピードで人格形成してんな。ま、いいか

「んじゃ、今から集めに行こうか。」

『了解』

.....

「お、あったあった。これで何個目だっけ？」

『20個目ですね。あと1個はおそらく発掘者の淫獣が持ってるんでしょう』

「お前、原作知識持ってるだろ？淫獣ってw」

『マスターの知識は作成された時に能力と一緒に流れてきましたから。』

「へー、んじゃ帰るか。」

『はい、それにしてもこれからどうするんですか？』

「ん？管理局となのはそれにフェイト陣にジュエルシードちらつかせて遊ぶ。」

『具体的にはどのようにしてですか？』

「ん？一個ずつ発動させて、回収させんだよ。」

『ちょwマスター、それってww』

「ふふふ・・・そう、完璧な悪役だぜ」

『まあ、マスターがその気になれば地球終わりですもんね。』

「まあ、そうだよな。世界を終わらす程度の能力とか作れば一瞬だよな。やらないけど」

『私、今ほどマスターの味方側でよかったと思いました。』

「そう？まあ、これから楽しんでいこうか。」

もう夜になっている。

暗いし帰って寝よう。原作まであと2日あるし。淫獣の念話が聞こえたらジュエルシードを思念体で発動して原作開始だね。

それにしても俺結構無敵すぎない？

プロローグ2（後書き）

次は主人公紹介です

主人公紹介（前書き）

チートすぎますね、はい

主人公紹介

・主人公紹介

名前：風華 桜花

性別：男

容姿：そこそこカッコいい（上の中＋ってところ）

性格：かなりマイペース。ピンチでも焦ったりせず逆に笑う感じ常に余裕を持っている。

能力：あらゆる力を操る程度の能力。

この能力により、現在は

・アースラや大きな建造物くらいなら破壊できるパワー

・多分最高速のスピード

・スターライトブレイカー（なのはリミット無し大人の）でやっとなにがつかくくらいの魔力耐性

・多少の攻撃なら傷つかない身体

を身体能力底上げでGET。

さらに

・某I Sの天才博士やジェイルスカリエッティの数十倍もの頭脳

・初対面でも5人に3人は一目惚れする魅力

を頭脳・才能底上げでGET

能力的には

・第一の世界 けいおん！で歌唱力や演奏力を世界一レベルで習得

・第二の世界 めだかボックスで異常・過負荷を全て習得

・第三の世界 とある魔術世界で全魔術・超能力・原石能力おまけで幻想殺しを習得

・第四の世界 BLEACH世界で死神化（全斬魄刀使用可能）、虚化、鬼道を習得

・第五の世界 戲言シリーズ世界で曲弦系、ナイフ使い、音使い習得
つて感じ

魔力ランク：EX

空戦ランク：EX

陸戦ランク：EX

魔力量：EX

作った能力

- ・見た技能を習得する程度の能力

- ・境界を操る程度の能力

- ・空を飛ぶ程度の能力

作った物

- ・色んな宝具（王の財宝も作り入れてある）

- ・スペルカード

- ・デバイス『イカロス』

- ・家の家具や調理道具

- ・デバイス

名前：イカロス

AI搭載のインテリジェンスデバイス

機能

- ・地球全土を覆える探索機能（ただし日本の面積を超える探索は桜花の魔力を使う）

- ・管理局を一瞬で乗っ取れるハッキング機能（これも桜花の魔力を多少使う）

- ・桜花の全力に耐えられるリミッター機能（現在5つのリミッター稼働、桜花は自分で100ほど付けてる）

- ・桜花のサポート機能

性格：桜花と同じでマイペース。結構人を弄るのが好き

備考

桜花の能力によって作られた最高のデバイス。

よって、桜花の使用時にのみ桜花の作成した能力のみ自由に使用できる。

例をあげるなら、桜花のピンチ時に境界を操る程度の能力で助けたりできると言うこと。

主人公紹介（後書き）

チートすぎますねハイ！

後悔はしていない。無双はほどほどにしますゆえ・・

あ、第2～5までの世界もいずれ書きたいと思います。

第1は・・気が向いたら・・きつと・・

桜花君の介入スタート（前書き）

介入しました。

一応言うと作者はフェイト好きです。

ですが別になのはが嫌いなわけではありません。
弄るのに最適なキャラなだけです。

桜花君の介入スタート

どうも、桜花君です！前回、原作介入を決め原作開始前にジュエルシードを全て回収すると言っ暴拳を犯しました！

んで、昨晚ついにあの淫獣からの念話が入りました。ははは！バカなことを！！

「おし、んじゃイカロスや。まずはジュエルシードについて考察してみようか。」

『はい？それはつまりどうゆうことです？』

「うん、まず原作だとさ？生き物達の願いや魔力を流すと暴走と言う形で発動したよね？」

『ああ、確かにそうですね』

「でも、基本これは願いを叶えるっつー用途で有ってるはずなんだよ。」

『はい？それは・・・つまり？』

「つまり、これは正しい順序で発動させればちゃんと願いをかなえてくれるんだよ！」

『な・・・なんだってー！』

「こいつの正しい使い方は、正しい量の魔力を正しい順番で21個

のジュエルシードに注入していくことなんだよ。」

『なんでそんなこと知ってるんですか？』

「うん？答えを知る程度の能力を作った。まあ、一回使用したら消えたけど。」

『うわ、ずるい』

「まあ、置いといて。ジュエルシードについては終わった。とりあえず正体を隠してジュエルシードをバラまくよ！」

『Yes ,sir』

「さて今晚、思念体化させてなのはを襲わせようか」

.....

～夜、なのはside～

今、私は昼間に助けたフェレットさんに呼ばれて動物病院にきたの
そしたらフェレットさんは喋りだし、黒い何かが襲ってきたの

「うにゃ～～～！どうすればいいの～～！！？」

「これを！僕の言うとおりにして！」

「赤い・・・宝石？」

「僕に続けて唱えて！」

「え？え？う・・・うん！分かったの！」

もうどうにでもなれなの・・・

く呪文割愛（呪文覚えてないんだよ！）く

カッ！！

「ええくくく！！？」

気づいたら、思い浮かべたとおりの格好になってたの

「すごい魔力だ・・・！！？来た！！！」

驚いてたら、黒いなにかが襲ってきた
思わず目をつむり衝撃に備えてたら。

「つまんね。もういいや戻れ。」

そんな声がして目をあけるとそこには私と同年くらいの男の子が
狐のお面をつけてそこに居たの
そして次の瞬間、黒い何かは綺麗な青い宝石になってその子の手に
収まったの。

くなのはside outく

〔桜花 side〕

さて、見ていたんだが・・・原作と違ってなんか弱い。あの悪魔・・・
つまらん!!!

んで介入!

「つまんね。もういいや戻れ。」

つってジュエルシードを回収。速攻で去る
その際にユーノの持つてるジュエルシードを超高速で回収し見える
ようにして去る。

「!?!?なんで全てのジュエルシードを!?!?!?」

だが聞く耳もたない!グッバイ!!

「ふははははは!これが欲しけりや奪いに来いやバーカ!?!?!?!」

ちらつと隠れてる奴にも目を向ける。

んん?原作と違う点はかなりあるみたいだな・・・
あんなところにフェイトとアルフがいやがる・・・

「・・・イカロス、転移。フェイトん家」

『了解・・・転移』

フェイトん家で待つとしますか。

・・・フェイト家・・・

「さて・・・そろそろ帰ってきててもよさそうなんだけどな・・・ん？来たか」

「がちゃ・・・」

「・・・ただいま」

「はーお腹空いたねえ！」

「てく・・・てく・・・てく・・・がちゃ」

「はろー！マイエンジェルフェイトちゃん。初めまして間近でみると一層可愛いね！」

「！？」

「あんた！！？」

「そう身構えんなよ、ほらそこに座れアルフ。あ、フェイトはこっち」

とりあえずアルフは警戒しながらもソファに座る。でフェイトは俺の膝に座らせる。

「？・・・ツ！！？／／／／」

「なんで、フェイトをそこに座らせるんだい!!」

「アルフよ、お前はフェイトを不細工とも思ってるのか？」

「そんなわけない!! フェイトは世界一可愛い美少女だよ!!!!」

「だろう? つまりそういうことだ。」

「そうか・・・そういうことが・・・なら納得・・・出来るかい!!!!」

「まあいいじゃろ。とりあえず落ち着きんさい。」

「む・・・なんなんだい・・・あんたは・・・」

「え・・・えと・・・私このままなの? / / / /」

「ふむ・・・むぎゅ〜!! うんこの抱き心地は最高なり〜」

とりあえずフェイトを抱きしめる。うむ最高!!!!

「ツツツ!!!!? / / / / /」ぼん!

「あらら、真っ赤だね〜」

「んじゃ、話をしようか。まずアルフとフェイトに言うておく」

「/ / / ... な・・・なに?」

「なんだい? とりあえずフェイトから離れろ」

「断る。・一つ、俺はお前たちが何の目的でジュエルシードを求めているか知っている。」

「「！！！！！！」」

「二つ、俺はジュエルシードを全て・持っている」「トッ
テーブルに偽ジュエルシードが全て入った瓶を置く。

「ッ・それで、どうするんですか・・？」

「・・・・」

「どうなんだい・・！」

二人ともなんか敵意全開でこっち見てるなあ・・ふむ

「特に、なにもない！！」

がしゃああ！！

「なに転んでんだよアルフ。」

フエイト？俺が抱きしめてるから転ばないよ？

「じゃあ、何しにここに？」

「ん？大好きなフエイトに会いに来たんだよ。」にっ

「ッ！！！！！！」

「さてと・・・よっ」

フェイトを座らせて俺は立ち上がり偽ジュエルシードを回収、そしてログアウト

.....

〈桜花の家〉

「さて・・・んじゃ改めて。今日はアニメでやったジュエルシード発動地点にジュエルシードを置いてきた。」

「そんで、悪魔の初戦を見てフェイトの家にお邪魔。んで今帰ってきたと・・・もう午前1時か・・・寝よう」

『では、あとの処理は私がやっておきますね。』

「ん、おねがゝい。明日からはとりあえず観戦して、予定としては管理局になのはと協力関係になればいいか。」

『ふむ、表では悪魔の友人として管理局と手を組み、裏ではお面装着敵役として暗躍と言うわけですね』

「zzzzz・・・」

『寝ましたか・・・おやすみなさいマスター。』

『とりあえず、悪魔とフェイトさんのデバイスにメッセージを送りましょう。』

メッセージ内容

——とりあえずジュエルシードを町にバラまいたから回収したけりやしてみろ白い悪魔（笑）・・・なのは宛て

——私のマスターがジュエルシードを町に配置したので回収をお願いします。マスターも貴方の目的が達成されるのを心待ちにしております。では御武運を・・・フェイト宛て

『ぶ。ww・・・ざまみろ悪魔！』

悪魔じゃないのー！

「なんか・・今、電波が・・気のせいですか。」

桜花君の介入スタート（後書き）

次は、フェイトとなのはの勝負です。

桜花君の転入となのはの初封印（前書き）

桜花くんの性格がけいおん！と違いますがそれは、転生の結果です。
容姿と一緒に性格も変わりますね。
だって、何年も生きてたら性格だって歪むでしょ？

桜花君の転入となのはの初封印

はいどうも、桜花君です。

前回、いろいろとお膳立てしました。具体的には原作を初っ端からブチ壊しました。

んで、日が明けて今日・・・つまり、なのはのジュエルシード神社戦の日の朝。

「桜花君は、とりあえず学校に行くことにしましたよっ」と

『マスター・・・誰に言ってるんですか？』

「こつちの話だ。にしても俺って今9歳なんだよな・・・仕方ないか」

『では、やはり聖祥大へ？』

「うん、転入するわ。とりあえず手続きは神さんの方でやってくれたみたいだし。」

今、俺の手には転入手続きの書類がある。

「んじゃ、行きますか。」

・・・・・・・・・・・・・・・・

なのは視点

今日は、私のクラスに転入生がくる見たいです。

「どんな奴かしらね？例の転入生」

「うゝん・・・でも、お友達になれるといいな！」

「そうだねゝ！」

とこんな感じですよ。かちゃんとアリサちゃんと話してたら。

バンツ！！

って音がして。

「ちーす！！三河屋でーす！！！！！！！」

・・・はっ！思わず啞然としちゃったのでもそれは皆おんなじみたいで全員あんぐりしてるの。

「うゝむ・・・インパクトがなかったか・・・面白くないなゝ・・・うん！」

「悪い、やり直すわ。んじゃまたね！」

ピシャン！！

「な・・・なんだったの？」

「インパクトならありすぎたわ・・・」

「もしかして今のが転入生君かな・・・？」

正直、凄い子だなーと思いました。

・・・10分後・・・

・・・ガラッ！

「ビクッ！！？」

「え？ど・・・どうしたの？皆？」

「「「いえ、なんでもないです。」「「「

息びったりなの・・・

「そ、そうですか？ではHRを始めます。まずはじめに転入生を紹介します。」

「「「「・・・」「「「「

「あ、あれ？どうしたの皆？嬉しくないの？」あわあわ

「・・・ま、まあいいです。それじゃ入ってきて。」

シーン・・・

「あれ？おかしいわね・・・」てくてく

ガラッ・・・キョロキョロ

「あれ？・・・どこに・・・？」

先生がドアの外を探していると、いきなり

「はい、ではH Rの続きと行きましょう。まずは私の自己紹介からですね！」

つてさっきの子が教卓で流れるようにH Rを始めたの。

「「「「ええ！？いつの間に！！！！？」」「「「「「

「えゝ私の名前は、風華 桜花と言います。桜花君と呼びなさい！」

「「「「いや！スルーしないで！！！！」「「「「「

そして、さりげなく命令形なの・・・

「色んな意味で凄い子なの・・・」

「む！そこの茶髪ツインテール！！！」

「ふえ！？な、なになぁ！？」

「いや、特になんでもない。」

「ないの！！！？」

「それじゃ、質問タイムゝ残り5分しかないからちゃちゃっと進めようか！」

「無視しないで〜!!」

つ・・疲れる!この子凄く疲れるの!!

「好きな食べ物は何?」

「わたしは?」

「可愛い!!?」

「好きな教科は何?」

「闇の魔術に対するb」言わせないの!!」——実技だ!」

「どこから来たの?」

「遠い異世界から!」

「嘘でしょ!!」

「好きな子はいるの?」

「内緒」

「じゃあ、このクラスでタイプなのは?」

「ふむ・・・」すつ

はあ・・・はあ・・・はあ・・・この子発言が突発的すぎるの・・・ん?
桜花君?がクラスを見渡してる・・・あ、眼があった。

「俺の好みはあそこの茶髪ツインテール、」

「え！？えええ！？」

「の右斜め後ろあたりの金髪さんだな」

「紛らわしいの！！！」

「そして私！？／／／／」

「ま！好きなわけではないがな！！！！あくまで好みと言っ話だ！うぬぼれるなよ金髪！！！」

「アンタねえええええええ！！！！私は金髪じゃなくてアリサ・バニングスって名前があんのよ！！！」

「怒るところはそこなの！？アリサちゃん！！！」

「あ、時間だ。じゃあ、HRを終わります。日直さんーれい」

「きりーっ、れい、ちゃくせき」

「なんでそんなに冷静に号令が出来るの！？」

「こんな感じで嵐の様なHRが終わった。

.....

く昼休みく

桜花視点

「いやゝ、うんとっても面白かったなゝ」

「なんで、私のところに来るの・・・」

「ん？オマエは結構面白いからね」

「そうなの・・・それと私の名前は高町なのはだよ。なのはって呼んで」

「なのはねえ・・・だが断る」

「なんでえ！？」

「アンタ達なに漫才してんのよ」

「桜花君はおもしろいね。」

「ははは、誰よりも面白い人生を過ごしてますから！」

転生とか転生とか転生とか・・・

「へー・・・でも最初っからぶっ飛びすぎなの！」

「確かに、あのHRは凄かったわ・・・」

「いやだってよ？あのくらいインパクトあればとりあえず第一印象

は強烈なものになんだろ？」

「た、確かに強烈だったけど。」

「それにしてもだ、にゃのはよ」

「なのはだよ!!」

「うん、話を聞こうぜにゃのは」

「な・の・は!!!!」

「にゃのは・・・お前は話を聞けんのか？」

「N A N O H A ! ! ! !」

「こいつ面白いな？」

「なのは壊れてんじゃない!!」

「ま、いいじゃん？とりあえずその手に持ったお弁当は食べないのか？そろそろ時間がないぞ？」

「あ、いけない！はやく食べよう！アリサちゃん！なのはちゃん！」

「俺の名前がないというせつなさ・・・」

「いいのよ。アンタの名前なんてなくても！」

「だけど気にしない！それが俺のジャスティス!!」

「もう・・・どうでもいいの・・・」むぐむぐ・・・

おやおや・・・暗くなりすぎてなのはさんほったにご飯粒をつけて
ますよ。

「なのは、ほらご飯粒ついてるぞ？」ひよいぱく

「ふええ！？／＼／＼／＼／」

「んん？どうした？顔が赤い・・・ああ、悪い恥ずかしかったか？」

「ふえ・・・ええええ・・・／＼／＼／」

「結構純粹なんだな！」にししっ

ちよつとだけわんぱくな感じに笑った。

「むぐっ！？／＼／＼／＼（こいつ、結構カッコいい・・・）」

「んん！！／＼／＼（桜花君の笑顔・・・可愛い・・・）」

なんやかんやで、フラグを建てる桜花くんなのだった。

・・・・・・

（放課後、神社）

「さて・・・そろそろなのはとユーノが来るころかな？」

カッ！

『発動しましたね。ジュエルシード』

「うん。ん？あ、来たよなの・・悪魔さんがw」

なのは視点

「悪魔じゃないもん！！」

「ど、どうしたのなのは？」

「いや、なんか悪魔って言われた気がして・・なんでもないの！」

「そ、そう？・・！！みてなのは！あれ！」

「え！？何あれ！？」

「生物を介して発動してる！本体がある分強いよ！」

「ぐうつうつするるるる・・」 「じりじり

「なのは！早く変身を！！」

「え！？ど、どうやって？」

「呪文！昨日教えた呪文を唱えて！」

「う、うん！・・・って覚えてないよあんな長いの！」

「えええ！？・・・仕方ない！もう一度言っから続けて！」

「分かったの！」

「がああああああ！・・・！」ばっ

「きゃああああ！・・・！」

『Set up!』

カッ！

『Protection』

がきいいん！！！！

「う・・・うん？あ、変身出来てる！レイジングハートありがとう！」

『いえ、なんてことありません。』

「がああああ！・・・！」

「なのは！はやく封印を！」

「う、うん！リリカル！マジカル！ジュエルシード！封印！」

「が・・・がああ・・・ううう・・・」ぱたっ

「・・・ふう。やったねユーノくん！」

「うん、お疲れ様！なのは」

「でも、この宝石どうすればいいの？」

「レイジングハートで触れて。そうすれば勝手にしまわれるから」

ぽん。きゅいん！

「これでいいの？」

「うん、じゃあ帰ろうなのは。」

「うん！」

桜花視点

「うーん・・・どう？イカロス？」

『はい、ばつちり高画質で映像に残しました！』

「将来、見せたらどうなるか楽しみだね！」

『マスターも人が悪いww』

「そしたら頼んでも無いのに高画質で撮ったお前もなw」

「じゃあ、帰ろっか」

『了解です。』

桜花君の転入となのはの初封印（後書き）

桜花君は楽しむことしか考えていません。
原作をばっちり知ってるのにね！

桜花君のなのは初戦闘介入（前書き）

なんか戦闘描写がおかしい！！

文才が欲しいよ！サントさ——ん！！！！

桜花君のなのは初戦闘介入

桜花視点

どうも、桜花君です。

転校してきてから数日。なのは達とも仲が良くなり、一緒にお昼を食べるほどになりました。

で、今現在もご飯中であります。

「え？すずかん家？」

「そう、今日行くからアンタも行く？」

「桜花君はなにか予定があるのかな？」

「んゝ別にないな。」

「じゃあ、行こうよ！」

「ははは、だが断る！！！」

「なんでえ！！？」

「今日は家に帰ったらパソコン眺めてニヤニヤしながら過ごすんだ！」

「それはただのニートよ！！！」

「貴様！二ートの何が悪いと言っんだ！」

「働かないで周りに迷惑をかける所よ！！」

「ま、冗談は置いといて。すずかん家知らないんだけど？」

「あ、じゃあ迎えに行くよ」

「無視すんなー！！！！！」

「やっぱり、疲れるの・・・」

ははは、なのはそれくらいで疲れてたらこの先やってけないぜ？

.....

く桜花家く

「さて、今日はすずかの家に行くことになったよ！」

『ではついにフェイトさんと？』

「うん、悪魔が衝突するな。」

『ではどうするおつもりです？』

「ん？割り込んでどっちも墜とす」

『マスター、鬼畜ですね!』

「大丈夫!本人たちの感覚じゃいつのまにか墜ちてる感じだから」

『ちょ、強すぎマスターww』

「ん?来たかな?」

ぴんぽーん!

「はい、今開けますよー」がちゃ

.....

↓車内↓

「でだ、なのはよ。」

「なにがでなのかわからないけど・・・なに?」

「あんさんの兄ちゃんがうちんことヤラシイ眼で見るんやけど・・・
そういう趣味の人なん?」

「いきなり関西弁!?って・・・ええ!?お兄ちゃん!そういう人だ
つたの!?!」

「ち、違うぞ!なのは!誤解だ!」

「またまた↓見てたんはほんまやん!」

「確かに君の事を見ていたが「やっぱりそうなの！お兄ちゃん！」だから誤解だなのは！！」

「やばいこの兄妹まじ面白い」

「く・調子が狂う・おい君！なのはに手を出したら承知しないからな！」

「なんや、なのはなんぞ相手せんと、僕だけを見るゆうことかいな？」

「なっ！？そんなわけ「お兄ちゃん・・気持ち悪いよ・・」ーーぐはっ！！」

「なんだ、ただのシスコンか」

•
•
•
•
•
•

すずか邸

「いや、おつきいな。」

「そう？ そんなことないよ。 それにしても・・・」 ちら

「
・
・
・
・
」
ズーン

「ねえ、桜花君・恭也さんは・・「すずか、見ちゃだめ！あーゆーのはほっときなさい！」・・うん」

「ねえ、桜花君。さっきのお兄ちゃんの事なんだけど・・・」

「なんだ、あれは冗談だぞ？だから安心しろ。」

「ほっ・・・よかったの・・・割と本気で」

「・・・はっ、俺はなにを・・・」

「んじゃ、シスコンも起きたことだし。入ろうか」

「あ、うん。ついてきて」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

～室内～

「おお、ここがすずかの部屋か？」

「いや、ここはただのテラスだよ。広いからね」

「そうか、それはそれとして俺に群がる猫達をどうにかしてくれないか？」

「「「「にゃーにゃー！！」「」「」」

「おゝ、よしよし。なにになに？へー俺からいい匂いがする？へー俺にはよくわからないけどな？」

「にゃー」

「ほほう、お前の名前はハルというのか、良い名前だな。ん？そうか主人につけてもらったのか。よかったな」

「猫と話してるの・・・」

「名前もあってるし・・・私が付けたのも当たってる・・・」

「（桜花君って・・・何者？）」「」

ま、そんなこんなでお茶タイム。
途中でアリサも加わり、賑やかになった。でアリサとなのはをからかってたら、空気だった淫獣ユーノとなのはが何かに気づいたように、原作通り森へ入ってた。

「なのは・・・大丈夫かしら。」

「なら俺に任せろ！アリサよ！冒険ついでになのはとあのフェレットを連れ戻してくるから！」

そういつて俺も森へ入って行った。

「森の中」

「にゃああああおおー！」

「おおーでかいな．．おっとお面お面．．装着！」

「そっといえばフェイトの家じゃ、はずしてたなコレ．．まいつか」

「とりあえず、現在進行形あの二人が戦ってるわけですが．．」

「そっといえばマスター、観戦するんじゃないんですか？」

「ん、気が変わった。ていうか読者もそろそろ戦闘とかチートが見たいんだよ」

『メタ発言全開ですね。もう少し控えてください』

「善処しますよ。んじゃ行こうか！」

『Set up!』

「おおっ！？いきなりセットアップすんなよ、びっくりするだろ！？」

『マスター、ここはリリカルなのはなんですからちゃんとバリアジャケット着て下さい。』

「それにしても・・・これが俺のバリアジャケットか・・・なんか和風だな？」

俺のバリアジャケットは上に某死神漫画の隊長羽織（でも無地で黒に青い線？が入ってる）っぱいのを着て腰を緑色の帯で軽く縛ってある。

下には青黒い袴をはいていて、後ろに羽織がはためいてる・・・なんかマジ和風というかこれでホントにバリアできんの？
って感じた・・・

「ま、いつか。お面にも合うし」

『そんなことはいいですから、やるなら早くしましょう』

「OK。んじゃ初魔法行きますか！イカロス光速砲撃シフト発動！」

『了解、光速砲撃S e t u p！』

「収束開始♪」

『ターゲットロック、収束・・・・・・・・完了！』

「んじゃ、二人には墜ちてもらうよ！バースト！！」

『レイ・キャノン
光の魔弾！！』

・・・・・・・・・・・・・・・・

フェイト視点

あの子がうちに侵入してきた日から数日手に入れたジュエルシールドは2つ。

今日も発動を感じてやってきたんだけど・・いつもと違ったのは白い魔導師の子がいたこと。

向こうもどうやらジュエルシールドが狙いみたい・・でも、渡すわけにはいかないんだ！

「シュート!!」

「くっ・・（幸い、相手はそんなに強くない・・魔力が高いだけ。これなら行ける!）」

「プラズマランサー!」

『Plasma Lancer!』

「ファイア!」

黄色い魔力弾が、なのはに向かっていく。

着弾と同時に爆発し、煙に包まれる。

「（多分、当たってない。だから出てきたところをつーー!?!）」

わたしは、出てきたあの子に追撃しようとした。

そしたら、いつまにか私は光に包まれて地面に向かって落ちていた。

「な・・・なにが・・・？」

わたしが意識を保ってたのはそこまで、最後に見たのは二丁の銃のデバイスを構えるお面の子と私に向かってくるアルフの泣き顔だった。

なのは視点

「あの子・・・強い！」

私、高町なのははジュエルシードを探しに森へ入った。

でもそこには大きくなった猫さんと金色の綺麗な髪をもった女の子がいた。

彼女はジュエルシードが目的で来たみたい。話をしようとしたら、攻撃されたの。

そこから今、向こうの方が強くて押されてる・・・

「くっ・・・！レイジングハート！」

『デイベインバスター！』

「シュート！」

私の出来る攻撃を打つ！でも、簡単に避けられちゃった・・・！

「プラズマランサー！」

『Plasma Lancer！』

「ファイア！」

黄色い魔力弾が襲ってきた！

「くっ・・・！」

急いでシールドを張る、そして上に離脱・・・しようとしたら

「え？・・・な、なにが・・・？」

いきなり光に包まれて、地面に落下していた。

「う・・・」

見ると向こうの子も落とされてた。意識を失う寸前、私はユーノクんに会った時みたお面の子を見た。

桜花視点

「・・・この攻撃さ、結構威力低い割に必ず当たるから鬼畜だよね」

『いや、マスター。光速で放たれる攻撃を防ぐはまだしも避けるなんて出来ませんよ普通』

「え？俺出来るけど？」

『それはマスターが異常なだけです。』

「さて、あの二人の視点の内にジュエルシードも回収したことだし、なのは連れて帰るよ！」

『え？あの子の怪我はどうす・・・ああ、能力がありましたね・・・』

「そのとおり！あらゆる怪我を治す程度の能力を創造！」

「あ、いたいた。なのは！・・・ユーノ、今から見たことは内緒な？」

ポウ・・・キューーン・・・

「よし、治った・・・」

「・・・（そんな・・・なんだ！今の力は！？）」

「よいしょっと、結構軽いなこいつ。」

「う・・・うつん・・・」

「じゃあ、帰るぞ。ユーノ」

その後背中のなのはを見て、アリサとすずかに迫られたのは別の話。

「フエイトはどうなったかな？」

『大丈夫でしょう。マスターあの攻撃3：7で威力配分しましたし。』

「いや、母親にあんな折檻されてるの知ってたら手加減もするですよ？」

『いいかげん、なのはのほうが可愛そうになってきた・・・』

桜花君のなのは初戦闘介入（後書き）

終わります。

そろそろプレシアと会うかな？

桜花君が温泉旅行に来たよ！（前書き）

けいおん！の休止からすこしだけプロローグを編集しました！

桜花君が温泉旅行に来たよ！

どうも！いつも元気な桜花君です！

えゝ前回、なのはとフェイトの両名を吹き飛ばした俺ですが。あの日から数日たちまして。

今は、なのは達と鳴海温泉に旅行に来ています。親のいない俺がどうやって来たか？福引で当てたのだよ！幸運能力作って！

イカサマ？ははは違うな、これは頭脳プレーと言って欲しいね！

「でだ、なのはよ。」

「なに？桜花君？」

「君のその首飾りはなんだね？いつも付けているが？」

はい、レイジングハートの事です。あえて意味も無く突っ込んでみたり！

「いや、これはその・・・そう！昔買ってもらったの！」

「へーそーなのかー」

「ほら、なのはもアンタも置いてくわよ！早くしなさい！」

「まあ、落ち着けよアリサ。だからツンデレと言われるのだ。」

「私はツンデレじゃない！！」

「アリサ、ツンデレは決まってそういうんだ・・・諦めろ」

間に封印するのは危ないし人に見られるかもしれないから。今は待機状態。アルフも温泉を楽しんでるみたい。

「私は、このまま待つてようかな。」

「ん？・・・誰か来る？」

「おー・・・私の嫁はっけーん！」

そこにいたのは、この前私を抱きしめてきた男の子だった。

「どしたの？・・・あ、ジュエルシードか。そういえばこちらへんにも置いたな確か。」

「・・・貴方の目的は、なんなんですか？私たちに回収させて・・・いったい何を・・・」

「ん？いや特に目的はないんだよ。ジュエルシードだって君らが集め始める前に全部集めただけだし。正直・・・知らないし？」

「なら、なんでこんなことを？」

「知らない、うんジュエルシードは知らないよ？でもさ、どーせなら面白いほうがいいじゃないか。丁度集めてる役者もいるんだし。だったらばらまいて競争させた方が面白いもん。」

わたしは、その考えを聞いて少し腹が立った。母さんのために動いてる私や、何か事情があつて動いてる向こうの子の気持ちを、ただ面白がるために利用してるこの子は、少し許せない。

「っ！なんで・・・君はどうしてそんなふうに考えられるの！？君は私のジュエルシードを集める理由を知ってるらしいけど、どうしてそんなふうに動けるの！？ただ面白いからだなんて・・・ひどいよ！」

「・・・はあ・・・」

「知るかい、そんなもん。お前の理由とかは俺には関係ないだろう？母親の為？結構じゃないか、でも俺がその理由を知ったからって、お前にジュエルシードを渡さないといけない理由にはならないだろう？」

「それはっ・・・そうだけど・・・」

「いいかフェイト。俺は、面白いことが好きだ。悲劇だろうと喜劇だろうとなんだろうと最終的に面白いものが好きだ。だから俺は、最後は皆が笑っている物語が好きなんだよ。」

「それは・・・ハッピーエンドとかしか嫌ってこと？」

「その通りだ！俺はなんだろうと最終的には皆が笑ってて幸せなラストを迎えることしか認めない！」

「じゃあ、このジュエルシードの事も？」

「おう、最後の最後にはお前もなのはもお前の母親もお前の使い魔も全員幸せにしてやるよ！」

彼の言葉を聞いた後、私は驚いた、そしてすこし安心した。面白いものが好き、その思想の裏には皆を幸せにしたいという想いがつま

っていたから。

「そう・・・そうなんだ。じゃあ、もういいよ・・・」

「そう？ん」というかお前、結構顔色悪いな・・・おいちょっとこっち来い。」

彼が私を呼ぶ、そんなに顔色悪いかな？そうおもいながら彼のもとへ近づく。

「ふむふむ・・・あゝあゝ・・・ダメだこりゃ。お前まともに食事とってないだろ？それに睡眠も足りてない。」

う、的確に指摘してきたよ・・・

「いやでも・・・ちゃんと栄養食品は食べてるし、2、3時間は毎日寝てるよ？」

「黙れ、お前はナポレオンか。いいから俺に任せろ。」

彼は私の頭に手を乗せ、1、2秒後には手を離れた。すると私の体のだるさや疲れ、折檻による痣や傷・・・あとこの前のお面の子に受けた傷がなかったことのように消えた。どうして！？なんでこんな・・・

「『オールフィクション大嘘憑き』全てを虚構にしてしまふ最凶のスキルだよ。」

「おーる・・・ふいくしゅん・・・？」

レアスキルだろうか？

「つまり、今のはフェイトの体の疲れや傷を”無かったことにした”って訳だ」

そんな因果を捻じ曲げるような力が・！？・ううん、彼は私を治してくれたんだ、気にしちゃダメだよね。

「えと・・・ありがとう・・・あゝと・・・？」

「おおっと、俺の名前まだ教えてなかったな。俺は風華桜花。桜花君と呼ばたまえ。」

「桜花だね。私はフェイト・テストロッサ。よろしくね」

「見事なスルーだなおい・・・。んじゃあ。そろそろ行くわ、せいぜい頑張れよ。・・・あ、あと俺の事はなのはや管理局とか会ったら言わないでくれ。今の力の事もね。」

「うん、分かった。またね、桜花。」

彼との二度目の出会いは私にとって有意義な時間になった。

桜花君が温泉旅行に来たよ！（後書き）

はい出ました大嘘憑き！はい定番のチート能力ですねえ。
でも後々制限するとかしないからね！！
でもやっぱり文才が欲しい・・・

桜花君が温泉旅行に来たよ！2（前書き）

温泉編終わりです。

桜花君が温泉旅行に来たよ！2

どうも、前回フェイトさんにすこしだけちょっかい掛けた桜花君です。

今はあの後、なのはたちと合流し温泉に入ってます。

「はふゝ・・・電気風呂に入りながら2、3時間足元でずっとマッサージしてもらって、そのうえコーヒー牛乳をあおってる感じが気持ちいいなあ」

「どんなたとえ方なんだ・・・」

「ははは・・・語彙力豊かな子なんだね・・・さて、君に少し話があるんだけどいいかな？桜花君？」

「・・・なんですかね？えゝと恭也さん？士郎さん？どっち？」

「ああ、僕は高町士郎。なのはの父親だよ」

「ですか。んじゃ恭也さんは向こうの女風呂にでも行って下さい。」

「なんでだ！！？」

「士郎さんが俺に話があるようなので、恭也さんには席を・・・いや場所をはずしてもらおうかと。」

「俺には、席も場所すらもくれないのか！！？」

「冗談くらいは普通に流しましょうよ、なにカリカリしてるんですか」

「むぐ・・・だが俺もここに居させてもらっからな!」

「いいですよ・・・それで、話つてのは十中八九なのは事だと思いますが・・・なんでしょうか?」

「いやね、なのはが最近君の事ばかり話すもんだから気になってね」

「へ・・・あのなのはが俺の事を・・・周りに男子がいらないんじゃないんですか?」

「ん?どういうことだい?」

「だから、周りに男子がいなくてここに俺がたまたま来たって話ですよ。珍しいんじゃないですかね?」

「ま、このままいけばアイツ絶対男の噂も無いまま行きおくれになりますよ?」

「な、なに!?君!なのはに限ってそんなことは!」

「言えるのか!ただでさえなのはには男の噂もなく、珍しく周りに現れた俺にもこうやって父兄が詰め寄ってくるんだぜ?どうだよその辺?」

「た、確かに!?そうか・・・そうしたらなのはの未来は!?」

「ああ・・・確実に未婚者のまま・・・人生を終えるだろう・・・」

「ああああ!!?なのはああああ!!?」

「だめな父親を許してくれ!!」

「やっぱおもしろいなこの家族」

そうして俺は先に風呂を出た。

・

・

・

なのは視点

今、私はアリサちゃんとすずかちゃんと一緒にお風呂を上がって部屋に向かう途中にオレンジ色の髪のお姉さんに絡まれています。

「えと・・・なんですか?」

「ふゝん・・・《良く聞きな。いいかい?これ以上フェイトの邪魔をするなら・・・がぶつと行くからね》」

「!?!」

「あはは、見間違いみたい。ごめんねお嬢ちゃん達、じゃあね」

そういつて、お姉さんは行っちゃいました。

「《ユーノくん・・・今のつて・・・》」

「《うん、おそらくあの黒い魔導師の仲間だろうね・・・》」

「なにあれ！なんなのよ！あの酔っ払い！むかつく！！」

「アリサちゃん、落ち着いて・・・！」

「あはは・・・」

・

・

・

桜花視点

「ふむ・・・アルフがなのはに絡んでんな・・・あ、こっち来た。」

「・・・あ、あんたは！」

「おいっすアルフ。お久しぶり！我が嫁は元気か？」

「フェイトはアンタの嫁じゃない！それにアンタに教える義理も無いね！」

「ま、さっき会ってきたんだけどね！」

「なっ・・・あんたフェイトに何かしてないだろうね・・・」

「ふっ・・・まあ、それは自分の目で確かめるんだな・・・ほら速く言った方がいいんじゃないか？」にやり

「っ！！？フェイト！！」ダッ

「・・・ふふふ」

『さすがに酷いんじゃないですか？』

「いやいや・・・だっていままでの5つの世界全部性格を変えて活躍してたんだぜ？たまには素を出したいよ」

『そうですか。ならいいです。』

・

・

・

はい、時間が飛んで夜になりました。卓球とか、混乱した恭也さんたちがなのはに詰め寄る様はとても面白かったです。

「さて・・・ジュエルシードをフェイトが封印したぞ、そんでなのはも飛んできたぞっと」

『マスター、これからどうするんですか？また打ち落とすんですか

『.？』

「いやイカロスお前・・・それは鬼畜すぎんだろ」

『では、どうするので？』

「ん・・・そうだね・・・どうしようか？」

『私に聞かないでください。』

「んじゃ、あれだ。なのはが負けるはずだから・・・よし介入しよう、そうしよう」

『その後は？』

「ん、一旦去ってなのはを迎えに来た設定でなのはに近づこう」

『了解です。とりあえずSet up』

「またいきなりですね。イカロスさん・・・」

・

・

・

三者視点

現在、なのはとフェイトは戦闘を行っている。

ジュエルシードを先に封印したフェイトのもとへなのはやってきたからだ。なのはの援護をしようとしたユーノもアルフと戦闘を行っている。

「くっ・・・」

「レイジングハート！」

『デイベインバスター！』

「デイベイン！バスター！！！！」

どおおおおおん！！

なのはのデイベインバスターがフェイトに向かうしかし

「はあ！！」

フェイトはシールドを張りそれを防ぐ。

「どうしてこんなことしてるの！？おはなし聞かせて！」

「話しあうだけじゃ・・・なにも変わらない！伝わらない！！」

『プラズマランサー！』

「ファイア！！」

また、フェイトの魔力弾がなのはに向かう

「きゃあ!」

『マスター!』

そのときレイジングハートがとっさになのはの足に羽根をはやしス
ピードをあげその場をかわす。

「あ、ありがとう。レイジングハート」

『いえいえ、マスター来ます!』

話している隙にフェイトがバルディッシュを鎌の形に変えて迫って
くる。

「うん!レイジングハート!もう一回、デイベインバスター!」

『デイベインバスター!』

「シュート!」

なのはの砲撃がフェイトに向かい、当たる。

「・・・やったかな?」

なのはが警戒を解こうとしたその時

『マスター!』

砲撃をかわしたフェイトが上から迫ってきた。

「!?!?きゃあああ!!」

「きゃあああああ!!」

その不意打ちに二人は避けられず地面に落ちる。そして何とか耐えた二人は上を見る。そこには。

「はははは!ジュエルシードはいただいたア!!」

最狂無敵の転生者が嘲笑うようにジュエルシードを手に使っていた。

「君は!?!」

「あのお面の子!?!なんでこんなところに!?!」

「お面?ああ、この事か・・・悪いなア・・・さっきまでの戦い、ちゃんと見てたぜ!」

「まあ、こんな簡単にジュエルシードを手に入れられるとは思わなかったけどね!!」

「それは、今の真剣勝負に勝ったフェイトちゃんの物だよ!返して!!」

「はあ?返すわけないだろう・・・でなきやとったりしないし?」

「くっ・・・!!?!」

「!!?!」

——ヴン——!!

そんな音と共に蒼黒い色のバインドが二人を捉える。

「なあ!!? バインド!? むぐぐ・・・!!」

「はああ!!・・・ぐっ!!」

フェイトとなのはは必死にバインドを解こうとするが強力すぎるバインドだから全然解けない。みるとアルフやユーノも捕まっている。

「んじゃあ、これで俺はいくわ。そのバインドも少ししたら解けるから。じゃね」

と言い残して桜花は飛んで行った。

・

・

・

なのは視点

「んじゃあ、これで俺はいくわ。そのバインドも少ししたら解けるから。じゃね」

そういってお面の子はどこかへ行ってしまった。

私はとても悔しかった。黒い魔導師の子に負けて、さらにジュエル

シードまで奪われちゃった。

私はとても弱かった。その事実がとても悔しくてならない。

「・・・」

「ぐっ・・・んんん!!」ぐぐぐ

隣では黒い魔導師の子がバインドを解こうとしている。
だから私は話しかけてみた。

「ねえ、きみの名前はなんていうの?」

「っ!?!・・・私は・・・フェイト・テストロッサ・・・」

「私は、高町なのは・・・よろしくねフェイトちゃん。」

「え?・・・えと・・・うん・・・」パキィ!

そうしてるとフェイトちゃんのバインドが解けた。私のはまだ解けない。

「・・・それじゃ・・・」

フェイトちゃんはオレンジ色のお姉さんのバインドを切り裂いて去っていく

「待つて!」

「もう私の前に現れないで。次来たら・・・手加減できない・・・」

そう言ってフエイトちゃんは去って行った。

そしてさっきまでの悔しさがこみ上げて来て、泣きそうになった。
そんなところに・・・

「おーいたいた・・・なに泣いてんだ？なのはよ。」

いつも私をからかう桜花くんがやってきた。

「おう・・・か・・・君・・・！？」

桜花君が温泉旅行に来たよ！2（後書き）

バンドで捕まり、さらにバリアジャケットにレイジングハートまで持つてるのは元へ現れた桜花君！さあ、どうなる！！

桜花君が温泉旅行に来たよ！3（前書き）

温泉編終わり！

桜花君が温泉旅行に来たよ！3

どうも、前回見事な悪役っぷりをみせた桜花君です。

そんでなのは達の前から去った俺は今、元の姿になり何食わぬ顔でなのはの元へ！

「おーいたいた．．なに泣いてんだ？なのはよ。」

「おう．．．か．．君．．！？」

おーびつくりしてる。どれ追撃！

「なのは．．その服はなんだ？コスプレか？杖まで持って．．ん？オマエの周りのその光ってんのは．．」

「え！？いや、あの．．これはその．．」

俺が指摘したのはバリアジャケットにバインドの事だ。

ちなみに普段は魔力を抑えてるから俺は魔導師とばれないのだ

「ふむむ．．．あれ？魔法的な奴か？お前魔法使いなの？」

さらなる追撃。

「え！？あわわわわ．．．」

「ま、そんなことはどーでもいいんですけどね！それより早く帰ろ
うぜ．．俺は眠いんだ！」

なのは「え・・・？あ！うん！」

と、なのはと帰ろうとするが、だがかし！なのははバインドに捕まっついて動けない！

「・・・桜花くん・・・これのせいで動けないん・・・だけど・・・」

「ん？なのはよ・・・それはなんだ？拘束術の類か？」

「う・・・うんそんなところ・・・」

「ふん・・・」

俺は、なのはに近づきバインドに触れる。

まあ、俺のバインドだし解けないことはあり得ない！

「えい」

パキン！

バインドが音を立てて壊れる。

「えええええ！？なんで！？」

「なんだ・・・結構脆いじゃないか・・・ホラ行こうぜ！」

「う、うん・・・」

そうして俺となのはは旅館に戻った。

フェイト視点

今私はあのお面の人に襲撃されてジュエルシードを取られてから、アルフと家に戻っている。

「フェイト・・・またご飯食べてないね！ちゃんと食べなきゃだめだよ！」

「大丈夫・・・少しだけど、ちゃんと食べたから・・・」

そう言っただけでアルフをなだめる。

明日は、母さんの元へ中間報告しに行く予定だし、早く寝ないと・・・

「おやすみ・・・アルフ」

「う・・・うん・・・おやすみフェイト・・・」

アルフ視点

私の主人、フェイトが寝た後私はベランダに出た。

「フェイト・・・」

フェイトの身を心配していた時――

「おー？なにたそがれてんだ？アルフ？」

あの時、フェイトに抱きついてきたあの男がやってきた。

「あ！お前！！あの時フェイトのところに全力で言っただけでフェイトなんにもなつて無かったよ！騙したな！！」

「あ、あの時のか？ごめん忘れたわ。」

「このっ！・・・まあいい、それで何しに来たんだい！」

目的がこいつの場合はつきりしない・・・何しにきたんだ・・・

「いやね・・・そろそろ大幅な介入をしてやろうとね！」

「どういことだい・・・？」

「つまり、フェイトとその母親、プレシアの仲を直す。」

「！？そんなの・・・！どうやって・・・」

「簡単だ、フェイトの集めてるジュエルシードの使用目的を先に叶えちまえばいいんだよ。」

「え？」

「ジュエルシード集めてるってことはそれを使用する目的があるわけだろ？なら先にそいつを叶えちまってゝそのあとはもうやりたい放題出来んじゃない？」

「え・・・そういえば・・・そうなるね・・・」

「だから、俺も明日プレシアとこに行くわ。」

え・・・？こいつ何言ってるの？

「何言ってるんだい！！そんなことできるわけないじゃん！！！！」

「俺に出来ないことは・・・うん、ほとんどないぜ！」

「・・・もういいよ、勝手にしな！」

もう、投げやりになった。

「んじゃ、旅館に戻るわ。明日の昼辺りにはこっち戻るからそしたらお邪魔するわ」

「はいはい・・・もうどうにでもなれ・・・」

桜花視点

そこで旅館に戻ってきた私桜花君です。
現在、日が明けて朝。帰る準備をしています。

「なのは達は帰る準備できたかい？」

「うん！できたよ！」

「はい、大丈夫です！」

「だいじょうぶです。」

「アリサって・・・敬語できたんだ・・・あ、おれも完了です。」

「私だって礼儀くらいはわきまえてるわよ!!」

「それじゃあ、行こうか。」

その後チェックアウトをとり。車に乗って鳴海市へGO!!

・・・移動中・・・

はい到着！2日ぶりの我が家です。

「ありがとうございます。士郎さん」

「いやいや、それじゃあね。桜花君」

「ばいばーい！」

「おう、じゃあね」

さて・・・行きますか！時の庭園!!

「イカロス」

『はい、というか出番が遅いです。』

「気にするな。んじゃ転移よろしく。」

『・・・了解、転移。』

次の瞬間、俺は時の庭園に来ていた。

「おゝここが・・・」

・・・ああ！！！！・・・ぐう！！！！・・・ぐあっ！！！！・・・

「なんか向こうの方からバチィ！バチィ！って音と悲鳴が聞こえるよ？」

『はい・・・原作通り折檻されてるんでしょう・・・』

「止めに行こう、そうしよう。」

・

・

・

プレシア視点

あの子、フェイトが持ってきたジュエルシードはたったの3個・・・正直失望したわ。
だから今、折檻している。今目の前でフェイトはボロボロになって倒れている。

「・・・次はちゃんと集めてきなさい・・・ジュエルシードを！」

「・・・はい・・・母さん・・・っ・・・」

そして奥の部屋へ戻ろうとした時。

「うわー家庭内暴力だ！幼女虐待だー！！ってことで俺の嫁傷つけた罪は重いぞコラ！デコピン10発の刑だ！！」

どこの誰だか知らない子供が、そんな言葉と一緒に入ってきた。

桜花君が温泉旅行に来たよ！3（後書き）

ちなみにフェイトは天然：A＋なんで桜花君とお面の人は別人と考
えてます。

桜花君とプレシアそんでアリシア（前書き）

今回は、原作ブレイクしました。

桜花君とプレシアそんでアリシア

はいどうも、毎度おなじみ桜花君です。

前回、温泉旅行の中でしっちゃかめっちゃかかきまわした揚句、プレシアん家に乗り込みました。

現在、フェイトちゃんが目の前でぼろ雑巾のようになってて少し怒ってます！

「・・・それで、貴方はだれなのかしら・・・それにデコピン10発って・・・」

「そうだ！私の可愛いフェイトちゃんの体にこんな傷をいっばい作りくさってなめた真似しくさるのう！覚悟はええんか！おお！！！」

「な、なんなのよ・・・別に私の所有物なんだから何しようと思手じゃない・・・！」

「ん？・・・それもそうか・・・？まいつか、どうせ元通りに戻せるし。」

俺はフェイトに近づき大嘘憑きを発動させる。

ん？プレシアの顔が固まってる。どうしたんだろう？

「どうした？プレシアよ？」

「今、何をしたの・・・？魔力も感じなかったし・・・」

「これか？これは俺の・・・レアスキル？の大嘘憑き。オールフイクション死ですら虚構に出来るスキルだよ！」

「!?!?・・・死んだことも虚構に出来るですって?」

『(マスター・・・大丈夫ですか?そんなこと言って・・・)』

「(大丈夫だ。悪用されないようこう言っとくから。)(まあ・・・人につき一回までだけだね?」

「どういうコト?」

「例えば、アンタが死んでそれを無かったことにして生き返らせるでしょう。そしたら、もうアンタはこのスキルじゃ生き返らせられないってことだ。逆を言えば一回までなら誰であろうと、人間じゃなかろうと生き返らせられる。」

「それは本当?なら・・・」

「んじゃ、俺は帰るわ。」

「待つて!貴方に・・・頼みたいことがあるの・・・!」

「えゝ・・・何?」

まあ、十中八九アリシアの蘇生だろうけどね!

「娘を・・・生き返らせてほしいの・・・!!!!」

「・・・ジュエルシードもその手段か?フェイトも・・・」

「ええ・・・そのためにアリシアのクローンであるフェイトを作った

のよ・・・でも！フェイトはアリシアにはなれなかった！だから、フェイトは私が慰めに作ったお人形・・・ただの人形なのよ！」

「へー、そーなのかー。」

ルー。アの真似を試みる。結構便利だぞこれ。

「・・・で・・・どうかしら・・・？」

「率直に言おう。お前がその考えを捨てるならええよ！」

「？その考えとは・・・？」

「フェイトを人形扱いするのはやめろ。ちゃんと娘として愛せ。」

「・・・どういうコト・・・？」

「はあ・・・いいか？あんたがどうであれアイツはアンタの娘だ。アリシアじゃなくフェイトって言うアンタの娘だ。逆にアイツにとつての母親は世界で唯一アンタ一人だけなんだよ！過程はどうあれ生み出したのはアンタだ！！それに・・・アリシアをこのまま生き返らせたら・・・アリシアは絶対悲しみに包まれるぞ？いいのか？理由は・・・言わなくても分かるだろう？」

「・・・ええ・・・分かるわ・・・私も・・・フェイトを娘として認める事でアリシアを失くした事実を受け入れたことになる気がして・・・そのことから目を必死にそむけてたから・・・でも、もう逃げない。」

「そうか、んじゃ・・・」

「ええ、フェイトも私の娘・・・愛すべきもう一人の娘として・・・向き合っていくわ。許してくれるか・・・分らないけどね？」

そういつてプレシアは悲しそうな、不安げな笑みを浮かべた。

「だーいじょーぶ！私のフェイトちゃんは天然で人見知りでなにによりマザコンが入ってるから！」

「・・・そういえば最初から私のフェイトと言ってるけど・・・どういう関係？」

「ん・・・俺が座ってる時に俺の膝の上に座るくらいの関係？」

そういうと、後ろから後頭部を蹴られた。

「ぶぎゃあ！！な、なんだ!？」

「あれはアンタがフェイトを座らせたんだろうが!!」

「あ、アルフ!??まで、話を——」

「この!この!このおおお!!フェイトは渡さない!!!!」

「ぐぎゃー!ぐげっ!ぎゃあああ!!!!」

「・・・あの・・・そろそろ良いかしら?」

「お・・・おう・・・じゃあ・・・アリシア・・・蘇生しようか・・・」
「ずりずり・・・」

俺はほふく前進で進んでいった。

・
・
・

プレシア視点

最初は、訳が分からない男の子・・・でも今は、フェイトと向き合わせるきっかけをくれた人・・・

その恩人は今・・・

「さて、んじゃアリシアを生き返らせようか！」

「さっきまでぼろぼろだったのに・・・」

「俺の大嘘憑きは怪我ならいくらでも直せるんだよ。」

「管理局の医療班に見せたら泣くわね。」

「まあ、俺のレアスキル？はこれだけじゃないからな・・・多分、管理局程度なら片手間で潰せるぞ？」

「・・・大嘘憑き？だったわね・・・その時もあったけど・・・規格外すぎない？あとのくらいあるの・・・」

「えーと・・・大嘘憑きと同じカテゴリに分類されるのは・・・1京2

858兆519億6763万3865個くらいかな？他にもいろいろあるけどね。」

「・・・もう、なにも言わないわ・・・」

「んじゃ、行くよ！」

あら、気がつけばアリシアの目の前に来てたみたい・・・

「まずは・・・培養機からだしてつと・・・わお素っ裸だっ」

「あーこ、これを着せて！！」

と私は焦ってそこにあつたコートを渡す。

「ん？うん、分かった。」

彼は、アリシアにそれを着せた。

『んじゃ、行こっか♪It's all fiction!』

彼が、口調を変えてそう言った。なにか気持ち悪いものを見た気がするけど、すぐに引っ込んだ。

「ん、オッケーかな？おい、アリシアちゃん？起きてー」ぺちぺち

「・・・」

「・・・ちゃんと生きてるわよね？」

内心、ドキドキしながら見る。

「ん？うん。一応息はしてるし、脈もある。生き返りは成功だよ？さて、起きてー・・・おい？」

「う・・・うん・・・なに・・・？」むくっ

アリシアが起きた・・・私はその瞬間涙を抑えられず、泣きながら抱きついた。

「アリシア！よかった・・・本当によかった・・・」

「え？ど、どうしたのおかあさん・・・？」

「いえ・・・ちょっと・・・嬉しくてね・・・」

「・・・」じー

「あっ・・・」

「・・・（アリシアが俺に気付いた・・・プレシアは抱きついてるから背後の俺に気づいてない・・・どうする？空気だぞ？俺・・・）」

アリシアと桜花は向き合って、視線を合わせ見つめあっている

「・・・」

「・・・（念話しよう・・・アリシアには・・・うん魔力はあるな。ん！おい聞こえるかい？）」

「・・・！？（え！？な、なに！？頭の中に・・・）」

「（うん、目の前に居る俺が頭に直接話しかけてるから、頭で考えれば会話できるよ。）」「

「（・・・えと・・・今・・・おかあさんがだきついてきてるのって・・・？）」「

「（うん・・・アリシアちゃん自分が死んだのって・・・分かる？）」「

「（・・・うん・・・わかるよ・・・）」

「（そう・・・じゃあ、説明するねまずは今この状況から——）」

「・・・説明中・・・」

「（って訳。分かったかな？）」「

「（うん！・・・ありがとう、お兄ちゃん！）」

「（・・・超幸せ・・・っと・・・ま、今はお母さんと話して妹に会うといいよ。じゃあ、俺は帰るね！また来るよ！）」

「（うん！またね！！！！）」にこー

・
・

・

桜花視点

いやーアリシアちゃんの笑顔はいいね〜・・・癒されるわー・・・

「さて・・・これからどうしようか？とりあえず家に戻ってきた訳だけど・・・」

『次は、暴走事件でしたよね？』

「うん・・・あ、明日だよ！」

『でも・・・プレシアの目的は達成したから・・・もうフェイトは来ないんじゃない？』

「ん〜ん！大丈夫！一応、これと同じ手紙を置いたから。」

プレシアへ・・・

あ。そういえば自己紹介してなかったね！

俺の名前は風華　桜花！9歳です！んでアリシア蘇生してなんだけど、頼みがある。

ジュエルシード集めを続けてほしいんだ。

理由は、お前達テストロッサ家が犯罪者として管理局に捕まらないようにするため。

幸い、向こうの対応が遅いこともあるからそこを利用させてもらう。

こっちは被害が出ないよう善意で集めてたんですって言い張るぜ！

んじゃ、そこんところよろしく。フェイトとアリシア・・・あとアルフにもよろしく言っといってくれ！じゃね！！

あ、あとフェイトには俺の事内緒にしといて！

「どうよ？」

『マスター・・・結構手回し良いですね・・・』

「いや・・・だてに600年近く生きてないからね・・・」遠い目

『マスター・・・』

「んじゃ・・・今日はもう遅いし・・・寝ようか！」

『・・・スリープモード・・・』

「・・・俺より先に寝ちゃうってどう思う？読者達・・・」ぐすっ

桜花君とプレシアそんでアリシア（後書き）

戦闘ないと結構楽だわー・・

ま、でもKYはフルボッコですけどね！！！

次回は暴走事件です！

桜花君と暴走事件その後フェイトとお風呂！（前書き）

今回は、なのはとの活動を開始しフェイトとお風呂にも入ります。

桜花君と暴走事件その後フェイトとお風呂！

どうも、桜花君です。前回、フェイトについて時の庭園へ乗り込みプレシアの目的をブチ壊してやりました！

しかし……個人的には原作の原型くらいは残したいのだよ……で！フェイトにジュエルシード集めを続けさせました。

「・・・どうも、フェイトは俺の事はお面の俺と別人に考えてるみたいだね・・・」

「え！？そうなんですか？天然すぎますね・・・でもなんで分かったんですか？」

「ん？俺の1京のスキルのうちの一つ、
グリップアウト『**掌握**』を使ったんだよ。」

「ふむ……効果はどのような……？」

「ん・自分の置かれてる状況や周りの状況、周囲の人の自分に対する評価や認識の確認が出来るんだよ。」

「ああ、それでフェイトさんのマスターに対する認識がお面verと違ったと。」

[illegible]

「ひゃっはあああああ！」

「ノリがいいな！？イカロス！？」

『「どうでもしないとマスターにはついてけませんよ。」』

「・・・そっか・・・」

フェイト視点

今は母さんの所から戻ってきてジュエルシード集めを再開している。

・・・でも母さん、私が帰る時暖かく送り出してくれたけど・・・何かあったのかな？

アルフに聞いても何も知らない見たいだったし・・・いつの間にか折檻の傷も無いし・・・

でも、今は母さんのためにジュエルシードを一刻も早く集めないと・・・！！

「・・・行くよ！アルフ・・・！」

「う、うん・・・でもフェイト！危険だよ！」

今私たちがやるうとしてるのは、ジュエルシードを強制発動させて封印すること。

アルフが言うように今の私の魔力量じゃ結構危ない・・・でも、やるしかないんだ！

「大丈夫、アルフがいるし・・・私は強いから・・・」

「・・・分かった・・・でも危ないと思ったなら止めるからね！」

「うん・・・行くよ！・・・アルタス、クルタス。エイギアス・・・！」

魔法陣が広がり魔力がためられていく・・・

・

・

・

桜花視点

「来た！強制発動！」

「え！？」

「そんな！？なにをしてるんだ！くそ、広域結界！間に合え・・・！」

今、俺はなのはの元へ来てジュエルシードを集める事を聞きだし、手伝うところまでこぎつけた。

まあ、そこところは割愛。力についてはプレシアと同じ感じに説明した。

「行こう！なのは！ユーノ！」

「うん！！！」

フェイトのもとへ俺達は向かう。

・

・

・

三者視点

「はあっ！・・・はあっ！・・・はあっ！・・・」

「・・・フェイト・・・大丈夫かい？」

「はあ・・・はあ・・・ふう・・・うん、大分落ち着いたから・・・大丈夫。でも向こうも近くに居るみたいだ・・・」

そしてフェイトとアルフはジュエルシードに向かって飛んでいく。一方なのは達も近づいてきていた。そして同時に封印を施す。

「リリカル！マジカル！」

「ジュエルシード！」

「封！」

「印！」

バルディッシュとレイジングハートがぶつかり大きな魔力がぶつか

る、その影響で両方にヒビが入りなのはとフェイトが吹き飛び小規模な次元震が起こる。それが示すのは――”暴走”

「っ!!!?」

「きゃあ!!!?」

「ジュエルシードが暴走している・・・!?」

「っ・・・!!!?アイツ!?」

桜花が見た先そこにはフェイトがジュエルシードを掴み魔力を抑えようとしているところだった。

「ちっ・・・!!」

「桜花!?」

桜花が走り出す。

・

・

・

フェイト視点

止まれ・・・止まれ・・・

「くっ．．止まれ．．!!」ぐぐ．．

ジュエルシードの暴走．．予想外の出来ごとだけど．．でも！母さんの為に．．!!

「くっ．．止まれ!!」

「何やってんだよ．．お前は．．」

そこに、あの時私を抱きしめて嵐のように去って行ったあの男の子
——桜花がいた。

「．．桜花．．!!」

「全く．．ホラ貸してみろ．．ほいっと!!」

桜花は私の手をどかしジュエルシードをつかみ取る。
そして次の瞬間には、暴走は止まりジュエルシードが桜花の手に握られていた。

「え．．?どうやって．．?」

「うん?いや．．前に教えたスキル．．覚えてない?」

「あ．．大嘘憑き．．だっけ．．?」

桜花は以前のスキルを使って暴走を無かったことにしてみたい．．
それにしても規格外だね．．

「ん？フェイト！？」

あれ・・・意識が・・・

「お・・・うか・・・」

私はそのまま気を失った。

・

・

・

アルフ視点

「フェイト！！」

あたしは気を失ったフェイトの元へ来た。
そこには桜花もいた。傷もまた直してくれたみたいだ。

「速く連れて行け。ジュエルシードもやるよ。管理局もこれで気づ
いただろう・・・早く逃げろ。」

「うん・・・ありがとう。桜花も気をつけてね・・・お面のアイツがま
た狙ってくるかもしれないし・・・」

「・・・う、うん・・・じゃあな」

そのまま私はフェイトを背負って飛び立った。

・
・
・

三者視点

「桜花君！大丈夫！？」

「おーなのは・・・だいじょぶ　だって俺だもん！」

「でもさっきの暴走はどうやって・・・ああ・・・あれか・・・」

ユーノは、さっきの暴走を収めた件を大嘘憑きの存在に行きつき納得した。

ちなみにユーノとなのはも桜花が手伝いを申し出た時に疲労を無かったことにされたのでこのスキルを知っている。

「なんか・・・桜花君だからって言うのがすごく納得できるの・・・」

「ジュエルシード、向こうに渡したけど・・・悪いね」

「まったく悪びれてないのが腹立たしいよ・・・！」

「んじゃ帰ろうぜー！」

「うん!」

「うん・・・」

そうして、今回のジュエルシード暴走は収まった・・・

・

・

・

「フェイト家」

「フェイト・・・」

「大丈夫だよ・・・怪我も桜花が直してくれたし、疲労も消えてるから・・・」

「フェイト!こんな無茶はもうしないでくれよ!!あたしはフェイトが傷つくのは嫌なんだ!」

アルフは事情を知っているが故にやめようとは言わないが、無茶や無理をするのは止めようとする。

「アルフ・・・うん・・・分かった・・・」

「・・・そうかい・・・じゃあ、ご飯にしようよ!フェイト!」

「うん!」

アルフが部屋を出ていくとフェイトは険しい顔に戻る
なぜなら、フェイトは無理をしないことを決めたが、内心では母の
為にと焦っていたから。

「ご飯！ご飯！」

「お、桜花！？なんで・・・」

「いや、ご飯と聞いたから食べに来た」

「フェイト！こっち来て！なんかテーブルに料理がいっぱい・・・桜
花！？」

「ああアルフ、ばんわー」

「ああどうもーって違うわー！！！」

「晩御飯を食べに来た・・・というか作ってやったぞ！感謝しろ！」
そう言つてフェイトとアルフと一緒にリビングへ出る。

「こ、これ桜花が作ったの？」

そうフェイト達の目の前にあるのは大量の料理。しかも豪華でとて
もおいしそうだ。

「そーだよ！桜花君印のおいしい料理を食べる？食べるよね？てか
食えー！！」

桜花のテンションについていけず啞然としている二人。しかし桜花に勧められ料理を食べ始める。

「！？お、おいしいよ！桜花！」

「おいしー！！」

フエイト達には絶賛で桜花も満足そうにし料理を食べる。

そして、食べ終わるとお皿には米粒ほどの料理も残らず綺麗に完食されていた。

「ごちそーさま！！！！」

「御馳走様でした」

「おそまつさま」

桜花が皿を流し台に持っていき洗い始める。
するとフエイトが

「あ、手伝うよ！桜花！」

「あ、じゃああたしも手伝うよ！」

そういつて三人で仲良く皿を洗う。

そして洗い終わると三人ともテーブルに着いた。

・

・

・

「はー・・・今日は疲れたね・・・」

「そうだね・・・」

「はあ・・・このお茶すごくおいし・・・」

今は桜花の入れたお茶を飲みながらのんびりしている。

「ふう・・・じゃあフェイト・・・」

「ん・・・なに？桜花？」

「風呂入ろうぜ・・・」

「うんいいよ・・・入る・・・」

「じゃあ、私寝てるから上がったら起こしてね・・・zzzz」

桜花と寝ぼけたフェイトは風呂へ向かう。

桜花は計画通り・・・、見たいな顔をしていた。
数十秒後・・・

「・・・ってちょっと待て！！！！コラ桜花あああ！！！！」

アルフが気がついて風呂場へ走っていくと、そこには

「あ、アルフ？起きた？」

「〜」

服を着た桜花が裸のフェイトの髪をシャワーで洗っているところだった。

フェイトは寝ぼけているうえに気持ちがいいのが幼児化して桜花に甘えている。

「あ・・フェイト・・!!桜花・・!!おまつ・・何して・・・!!」

驚きすぎて上手く喋れてないアルフ。そんな彼女に桜花は一言こういった。

「可愛いよね〜こいつ。ほらアルフもよく見てみなよ」

「あ・・ああ・・確かに・・可愛いねえ・・フェイト」

「おうか〜」

アルフは言われたようにフェイトに視線を移すとそこには甘えるフェイトが気持ちよさそうに頭を洗われている。

「「ホント、可愛いね〜フェイト。」」

そこから頭を洗い、身体を二人で洗って風呂から上がったあと服を着せるとフェイトが目を覚ました。

「ん？目が覚めた？フェイト？」

「ななななななななな・／／／／／／／」

フェイトはさっきまでの事を思い出すと顔を爆発しそうなくらいに真っ赤にして固まってしまった。

「なあ、アルフ？フェイトが顔真っ赤にしてるんだけど、これってやっぱ俺のせい？」

「当たり前だろうが！」

「ぶしゅ・・・・／／／／／」

そしてフェイトはそのまま気絶した。

「おっと・・寝ちゃったよフェイト。んじゃ俺は・・フェイトをベツトに寝かせてくるわ。」

「うん・・分かった。じゃありビングで待ってるから話聞かせてもらうよ？」

「はいはい」

・

・

・

桜花はフェイトを寝かせ、リビングへ戻って来るとアルフが桜花に聞いた。

「で、なんでここに来たんだい？」

「いや、言い忘れててさ。フェイトには・・・話しちゃった？」

「いや・・・プレシアに言われて話してないけど・・・？」

「そっか良かった。んじゃまずは状況と関係者について話しようかな！」

「まず、さっきお前が言ったお面の男。それぶっちゃ俺だから。あと、白い魔導師・・・こいつは高町なのはってんだけどジュエルシードの発掘者のユーノ・スクライアって奴の協力者だ。ばらまかれたジュエルシードを回収するために行動を共にしてるわけだ。んで管理局も今回の件で動くだろうから俺は向こうの協力者として動くことにする。お面の俺は敵役、つまりフェイト側の俺ってことだな。で、フェイトとアルフはこのままなのはと対決しつつジュエルシードを集めてもらってからそういうことで！じゃ質問は？」

「ちょっと・・・待って・・・確認。」

「おう」

「アンタがあのお面の奴の正体で？」

「おう」

「あいつら・・・なのは？達はアンタが散らばってたジュエルシードをまたばらまいたのを回収目的で集めてて？」

「おう」

アルフ「あんたは管理局側、お面のあんたはこっち側で動くつもりで？」

「おう」

「あたしたちはこのままジュエルシードを集めろと？」

「おう、そんでお前たちを犯罪者にせずにまた暮らせるようにするんだよ。」

そこまで聞いて桜花は思い当たった。あれ？これ俺がかなりかきまわしてない？、と

「アンタが全部かきまわしてんじゃん！！」

しかも結構良い方に進んでるから腹が立つ。

「まあまあ・・・いいじゃん？大丈夫、俺に任せろ！」にこつ

その時桜花は見た者全てが安心するような広く温かい笑顔を浮かべた。

「っ・・・！！！！？／／／／／」

アルフはその笑顔を見て顔を赤くする。

「ま・・・まあ、フェイトが幸せになるなら良いけどさっ！／／／／／」

「・・・顔が赤いぞ？風邪でも引いたか？」

「なんでもない！！！」

桜花は訳も分からず首をひねるばかりだった。

・

・

・

翌日

「ははは！おはようフェイト！！！」

「桜花・・・？っ！！？／／／／／／」ぼん！

と言ったやり取りがあつたのは別の話・・・ではないなうん

桜花君の現状確認 (前書き)

現状確認です。

桜花君の現状確認

桜花君だよ！！！！今回は現状確認です。

状況

桜花君は今なのはと活動中、いずれ管理局と協力関係になるつもり。今はフェイトの家にあります。

能力的には異常・過負荷やリリカル世界の魔法を主力としてリミッターも付いている、100個ほど付け今はAAランクとなっている。100個はすせばEXランクに上がるよ！！なんせ全魔力を解放したら次元断層どころが次元が粉々になるくらいだから！（結界の中なら、でもかなり強力な結界を何百と重ねた結界の中なら全開放でもOK）

なのはやフェイト、まだ出てないけど管理局側はお面の桜花と普通桜花は別人と考えている。

桜花君が来たことで原作が少しだけ変わっているようだけど今のところ大きな変化は見られていない。

（作者的には無印の間は変化を与えず、A / S編で変化を加えるつもり。）

力関係

桜花>>>>>>>(越えられない壁)>>>>>>>フ
エイトなのは>>>>>>>ユーノアルフ

（管理局はのぞくがクロノはフェイト達より実力は上。）

桜花君の行動記録

リリカル世界に来る

能力確認、イカ口スを作る。

ジュエルシードを意味も無く集め終える。

またジュエルシードをばらまく

フェイトの家でフェイトと素顔で会う

学校に転入、お昼になのは、アリサ、すずかにフラグを立てた。

温泉旅館やすずかの家の庭でお面の桜花君で介入

時の庭園でプレシアの目的を叶える

暴走事件を止める

フエイトン家で食事、一緒に風呂に入る

結果、フェイトとアルフにフラグを立てた。↑いまここ

とまあ、今こんな感じですね。

桜花君の現状確認（後書き）

こんな感じです。では次回から本編です。

番外編 桜花君がDOGDEYSに勇者として召喚！（前書き）

ドッグデイズの小説読んだらかきたくなった。
結構気分屋な俺

番外編 桜花君がDOGDEYSに勇者として召喚！

「召喚！勇者 桜花君だよ！」

桜花「ふむふむ、つまり？俺はビスコッティという国の勇者として戦に参加し勝てばいいわけですか？」

ミルヒ「はい！我が国は最近の戦で負け続きで・・・お願いできますか？」

桜花「いいよ」

はい、今は姫さんのセルクルつつーなんかよくわからんアヒルみたいな動物で移動中。

もちろん原作知識はもってます。はい現状確認はばっちりです。

ミルヒ「はい・・・そうですね・・・そう簡単には・・・っていいんですか！？」

桜花「いいって言うてるじゃないか。要するに、あの猫耳の奴ら全員叩き潰せばいいんでしょう？」

ミルヒ「は、はいそうです・・・あのいいんですか？」

桜花「おもしろそうじゃん？いいよ、見てろ絶対勝たせてやつから」にこっ

ミルヒ「あ、ありがとございます！！！！！！！！」

くエクレールと出会い、閣下との勝負く

桜花「ちわー、勇者参上であります！」

エクレ「む・・・騎士団親衛隊隊長のエクレールだ・・・」

桜花「ほらほら、ムスつとしないの！可愛い顔してんだから笑いん
しゃい！」

エクレ「んなっ・・・何を言ってるんだ！貴様は！！！！！！」

桜花「んで、聞きたいんだけど、紋章術ってこつやるのであつて
る？」

桜花の手の甲に青白い紋章が浮かぶ。

エクレ「ああ、あつてるぞ。だが紋章術は体力を使う。気をつけて
使え。」

桜花「オッケー。つと！？」ギーン！

桜花がどこから飛んできた斧を持っていた黒刀ではじく。
ちなみに桜花君はなのはのときのバリアジャケットと同じ姿で黒刀
と白刀の二刀流だよ！

レオ「ほお、今を防ぐか・・・だが所詮は犬姫の手下か。」

司会『ななななななんと！あのレオ閣下の獅子王炎陣大爆破が！勇者の紋章術の大津波にかき消されたああ！！？しかも当のレオ閣下も倒れ伏している——！！！！あの勇者、レオ閣下をあつさり倒してしまったああ！！！！』

[illegible]

当然、この結果に大勢の人々が驚愕し大騒ぎしている。

エクレ「おい勇者！なんだ今のは！！？しかも閣下と一緒に周りの奴ら全員猫玉になっちゃってるじゃないか！！」

桜花「見たかエクレ！勝ったぞ！！さて早く城落としに行こうぜ！
！」

エクレ「無視するな！ちゃんと答えろ！！」

桜花「はははははははははは！！！！！」

その後、勢いに乗ったビスコッティ軍は久しぶりに勝利した。

くお風呂での出来事、そして姫様誘拐、だが防がれる。

桜花「おふろ、おふろ、おつふつろ」

かぼーん・・・

桜花「広いなおい！テンションあがるぜ！」

ミルヒ「えっ！？勇者様！？」

桜花「おつす姫さん！なんだ姫さん入ってたのか！ん！なら一緒に入ろうそうしよう！」

ミルヒ「ふええ？！ええええええ！！？い、いえ！私はも、もう出ますから！！で、ではごゆつくり！」タタタ・・・

桜花「行っちゃった・・・ま、いつか」

ちなみに言つとくけど、この桜花君は高校生くらいの年齢だからね？ミルヒの肉体年齢は15歳くらいだから、桜花君は別に欲情とかはしません。なぜならこの600年で開き直っちゃったから！！

” きゃああ！！！！ ”

桜花「ん？そういえば姫さん誘拐されんだっけ・・・はあ、行きますか仕方ない。風呂の時間を邪魔した罪は重いぞ・・・」

この桜花君は大のお風呂好きなのですよ！

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

外

桜花「……おい、姫さん無事か？」

「われら、ガレット獅子団領！」

「ガウ様直属秘密諜報部隊！」

「『ジエノワーズ！！』」

なんか、馬鹿そうな三人組が現れた。そして真ん中の娘から次々話します。

「勇者さま。あなたたちの大事な姫様は我々が攫わせていただきま
す」

「こちらはミオン砦で待つてるからなあ」

「姫様がコンサートで歌われる時間まであと一刻半。無事助けにこ
られますか？」

「つまり大陸協定に基づいて用心誘拐奪還作戦を開始させていただ
きたいと思います。こちらの兵力は200。ガウル様直下の精鋭部
隊」

「で、ガウル様は勇者様との一騎打ちをご所望です」

「勇者様が断ったら姫様がどうなるか」

桜花「つまり、姫さん返して欲しけりやそっちの悪ガキと闘り合え
つてこと?」

「そうです。どうしますか?」

桜花「んゝ・んじゃあれだとりあえずその姫さんちょっと貸して
?」

「あ、はいどうぞ」

桜花「ありがと」

桜花のさりげない頼みで抱えられていたミルヒが桜花に渡される。

桜花「んじゃ、またねゝ。あとやりたきやいつでも相手してやっか
ら、そっちの悪ガキにこっちに出向けと伝えといて」

「ああ!?!? 姫様とられてる!?!?」

「うかつでしたね・・なんて巧妙な・・」

「むむむ・・一旦退きましようか・・」

と三人は去る、が

桜花「だが、逃がすとも思っているのか馬鹿娘共」

目の前には勇者桜花が怒りの笑顔を浮かべて立っていた。

「あ、あ・・・ああ・・・」

三人はその笑顔におびえている。

桜花「俺のお風呂タイムを邪魔した罪を償え！！！！くたばれ馬鹿どもおおおおおお！！！！」

「只今、お仕置き中（バキイ！！ヤメテエ！！オラアア！！ズガガガガガ！！ナンデソンナモンショウジュツツカエルノ！！？ギヤアアアアア！！！！）」

桜花「ふう・・・ああ、すっきりした」

ちなみにこの光景は放送中である。

三人娘「・・・・・・（ちーん・・・）」

真っ白な三人も、すっきりした笑顔の勇者もばっちり放送済みである。

ミオン砦

ガウル「・・・なあ、ゴドウィン・・・俺、勇者に手を出すのやめとく・・・」

ゴドウィン「それが、いいでしょう・・・」

この時ガレット、ビスコッティ問わず皆が思った。

「『この勇者を怒らすのはぜったいにやめて
おごう……!』」

とね

その後、何日たつてもこないガウルを待ちかねて桜花君が直接乗り込んでいったのは別の話♪

→後日談、レオ閣下。星詠みの変化→

レオ「あれ！？なんか今までと違っではつきり見えるのう・・ええ
！？」

そこに見えたのは、いつも見ていたミルヒの死ではなく、原因である魔物をフルボッコにしている桜花だった。

後ろでは自分とミルヒがポカーンとしている。

レオ「どこまで化け物じみておるんじゃあの勇者は・・・」

だがレオ閣下の表情はとても柔らかで憑きものが落ちたような顔をしていたという。

番外編 桜花君がDOGDEYSに勇者として召喚！（後書き）

この平和な世界に桜花君なんてチート入れたら、バランスが崩れま
すね。

多分、番外編でくらいしか書かないんじゃないかな！

桜花君のKYフルボッコ（前書き）

やっと、桜花君がまともに戦える・・・かな？

桜花君のKYフルボッコ

はいどうも！桜花君です。前回、フェイトとお風呂に入ったり一緒に布団で寝たりと結構良い感じに幸福な目にあってきました！！フェイトの髪はとてもいい匂いがして抱き心地もそこの抱き枕とは比べ物にならないくらい良かったです。

ははは！！フェイト好きの読者！ざまー見ろ！！ちよ．．！痛い！
！石投げっ！！待て待て！！その岩はしゃれになんて！！ちよつ．．
！！ぎゃあああああああああ！！！！！！！！！！

•

•

ま、まあそんなわけで一晩泊まり、今日！遂に管理局が介入してきます。とりあえず当面の目的はKY行動する奴になってもらうことにします。

そんなわけで今は学校に来てます。アルフには放課後に動いてもら
うように言っていたんでね。学校は行かないと！

「先生！この時間、懸賞ハガキを書きたいんですけど良いですか！？」

「駄目に決まってるでしょう？懸賞なんて当たるわけないんだから・
・・」

「先生！！そうやって諦めるのはよくないと思います！！人間、愛があれば必ず通じるんですよ！！！？ならばハガキだって愛を込めて書けばちゃんと通じるでしょう！！！」

「良いからアンタは黙って授業を聞きなさい！！」ばし！！

「ぶべっ！！」「ごんっ！」

アリサの一撃で俺は机に頭からダイブした。そのまま失神したフリをしてハガキを書く。

「・・・」じー

なのはと目が合った。

「なのは！ここは手をかすんだ！黙ってればやり過ごせる！！！」

俺はなのはに小さな声で叫ぶように頼む。

「・・・わかった、いいよ」

「ホントか！ありがとう！」

さて、ハガキの続きを――「せんせー、桜花君が寝たふりしてハガキ描いてます！」なのはああああああ！！！！

「なぜだ！なぜ裏切ったなのはああ！！！」

「手は貸すって言ったけど、口は貸した覚えはないの」

「ぬ、ぬかったわあああああ!!!!」

「あの・・・授業進めていい?(泣)」

「それで、まあいろいろやって放課後!時間が飛んだ?知らんがな!!
で、なんかなのは達がごちゃごちゃ騒いでます。」

「・・・・」

「なのは!なにか悩んでるんだったらいいなさいよ!!友達でしょう!!!!?」

「ごめんね・・・アリサちゃん・・・」

「っ・・・・!!もういい!!行くわよ!すすか!!」

「アリサちゃん!?!えと・・・ごめんなのはちゃん!じゃあね・・・!!」

「そういつてなのはもとからアリサとすずかが帰って行く。」

「なのはは温泉の時や暴走の時に何もできなかったことで悩んでいる
ようだが、実際そんなことを相談できるわけも無い。」

「なのは!帰るぞい!」

「あ、桜花君・・・うん、わかった・・・」

・

・

帰り道

「・・・なのは？どしたん？」

「桜花君・・・私どうしたらいいのかな・・・？桜花君が私を見つけた時の温泉旅館の時も、暴走の時も・・・私何も出来なかった・・・アリスちゃんにも心配かけて・・・」

「・・・」

え？これシリアスな場面？なんで俺がこんな相談受けてんの？・・・はあ・・・まあいいやってやるよ・・・

「なのは、アリスの件はちゃんと謝つとけ。人に言えないような悩みくらいある。そんなことは向こうだって分かってる、だからちゃんと謝って自分で解決するから心配するなって伝える。んで・・・魔法の件だが・・・お前は何もできないわけじゃない。でもな魔法をしって数日のお前がなんでもかんでも出来たらおかしいんだよ。だからお前はお前が今できる事をしろ。」

「今・・・出来る事・・・？」

「フェイトと話がしたいんだろう？」

「・・・うん・・・うん！分かった！！私頑張るよ！明日アリスちゃん

「にもちゃんと謝ってみる！ありがとう！桜花君！」

「おー・ガンバッター・」

シリアスとかマジ勘弁・超めんどくさいし。

•

●

●

で、現在はフェイトとなのはがジュエルシードを探し当てたところ
です。

なのはとフェイトが木の化け物に對峙してます。

「があああああああああ……！！！！！！！！！！」

「プラスマランサー!!! ファイア!!!」

ズガガガガガガ！！！！！！！！

「ディバイン！バスター！！」

ずがああああああああああああああん!!!!!!!!!!!!!!

未来の魔王と死神が猛攻撃を仕掛けている。しかし

「!? あいつ生意気にシールドを張ってる!」

「なのは!!」

獣組は鎖のバインドで動きを止めてるけど・・・
さて、そろそろ介入しますか！

「でええい!!」

俺は純粹な蹴りでシールドを壊した。あれ？すごい脆いなこのシールド。

（それは貴方が規格外なだけですby作者）

「ええええええ!!？桜花君？なんでえ!!？」

「凄い・・・」

ちなみに俺バリアジャケット着てません。なぜならお面の時に着てたから！フェイト達にはばれたくないんだよね・・・あ、ユーノとアルフは知ってるよ？俺が教えた。

「さて、やりますか！」

なのは視点

今日は、桜花君にも励ましてもらってジュエルシード探しにも気合がはいってます。

絶対にあの子に話を聞いてもらうの!・・・？なんで桜花君あの子の名前知ってたんだろ?・・・まあいいよね・・・

「なのはー!!」

「あつ・・・!あの子・・・それになにあの大きな木!？」

そこにはあの綺麗な髪の子とジュエルシードの発動した木が戦っていた。

「あのー!」

「!?!フェイトの邪魔するな!怪我しなくなったら引っ込んでな!」

「今は言い争ってる場合じゃない!とにかく今は封印を!」

そういつて封印しようと闘ってるんだけど・・・

「全然、攻撃が通らな〜い!!」

「固い・・・!!」

あの子と私の攻撃は全部シールドに防がれてしまい通らない。
すると、どこからかある男の子が木に近づいて。危ない!!と思っ
たら

「でええい!!!」ずがああ!!

その子は蹴りで木のシールドを壊しちゃった!でたらめなの!!
て
いうか桜花君だし!!!

そしてそのまま桜花君は走り出して木の根や顔、枝をどこから持ってきたのか木刀で切り裂いていく。

「ええええええええ！！？桜花君？なんでえ！！？」

「凄い・・・」

となりであの子も目を見開いてびっくりしてる。あ！今チャンスじゃない？

「あの！！・・・貴方のお名前・・・聞かせてくれない？」

「あ・・・私は・・・フェイト・・・フェイト・・・テストロッサ・・・」

「わたしは・・・なのは！高町なのはだよ！」

「・・・そう・・・」

そしてフェイトちゃんにまた話しかけようとしたら・・・

「なのは！フェイト！終わったぞ封印！！！」

「！？」

「あ、うん！分かったの！」

桜花君が木の化け物を倒して呼びかけてきた。そして同時に動き出してフェイトちゃんと一緒に封印した。

桜花視点

「ふう・・・やっと終わったか・・・ん？」

『どうしましたか？』

「ああ、イカロスカ・・・ごめんな使ってやれなくて。」

『いえ、気にしないでくださいマスター。それでどうしました？』

「いやあいつらジュエルシードはさんで何してんのかなって・・・」

『原作は見たでしょう？戦うんですよ。』

「やっぱ？はあ・・・暴走するぞまた・・・」

『でも・・・KYが来ますよ？管理局の方も転送装置を起動させましたし。』

「うそ、なんでわかんのか！？」

『私を作ったのはマスターですよ？管理局のデータベースなんて1秒あればいくらでものっとってやれますよ？』

「お前も大概バグだよな」

『あ、マスター。二人がぶつかります。それと転送、来ます！』

「んじゃ行こうか!!」

桜花が飛び立つ。

三者視点

桜花がそんな感じの時、フェイトとなのはが会話をしていた。

「ジュエルシードには・・・衝撃を与えたらダメみたい・・・」

「うん・・・そうだったらレイジングハートもバルディッシュも可哀
そうだもんね・・・」

「でも・・・譲れないから・・・」

フェイトがそう言って構える。

「わたしはお話したいだけなんだけどな・・・」

そう言っただけなのもまた構えた。

ジュエルシードを賭けて両者が駆けだしたその時――

「二人とも武器を納めろ!ここでの戦闘は危険だ!!」

と割り込む黒い影。

二人は、それに気付き急停止をかける。だが

「死ね！！このKYがあああああああ！！！！！！！！！！」

すっぱあああああああああ！！！！！！！！！！

「ごはああああ！！！！？」

と桜花がクロノをこれまたどこから出したのか白いハリセンで思いつきりはたき落した。

二人は困惑する。

「え・・・えつと・・・？」

「・・・？」

だがかまわず桜花は喋りだす。

「アホかお前は！！空気読めよ！！今のはぶつかるところだったじゃん！！わっかんないかなア！！ええ！？だからKYとか変態とかシスコンとか言われんだぞボケが！！」

「なっ・・・なんなんだ！君は！邪魔をするな！！」

「知るか！邪魔も何もねえよ！邪魔したのはむしろそっちだろうが！！！！！！」

「くっ・・・これは公務執行妨害だ！よって君を逮捕する！！」

「やれるもんならやってみろや・くされKY」

「この！！！！」ドドドド！！

クロノは魔力弾を桜花に向けてはなった。一般人
・・・

の桜花に向けてである。

桜花はそれをあえて受ける。

ずがああああああああん！！！！！！！！！！

「桜花君！！！！？」

「桜花っ！！？」

二人とも、直撃した桜花を心配する。

しかし煙が晴れて出てきたのは――

「全然、聞かねえなア！蚊が止まったみたいだぜ！！」

――無傷の桜花であった。

そこから桜花の一方的な過剰防衛
ワンサイドゲーム
が始まる。

桜花君のKYフルボッコ（後書き）

フルボッコにはならなかったですね・・・！

でも次の頭からはちゃんとそうなってます。
では次会いましょう！

「・・・死んでないよね？」

「ん？知らない　なら確かめてみようよ！」

「確かめる・・・？」

「どうやって？」

「そんなの普通に起こせばいいじゃないか」

「そーそー、普通に起こせばいいんだよ」

桜花はクロノに近づいて——その腹を思いっきり踏みつけた。

「ぐぶううおあ！？」

クロノが飛び起きた。

「桜花君・・・酷過ぎなの・・・」

「そこは普通に起こそうよ・・・」

「んじゃ、イカロス通信妨害と音声妨害解除」

『all right・全妨害結界解除。』

ブウン！

そんな音がしたと思ったら。

「――ノ！――ノ！！――クロノ！！！！！」

と通信が入る。

そう、皆おなじみリンディ提督だよ！

「げほつ。・げほげほ！！！か、母さん！？あ、いや提督。」

『クロノ！大丈夫なの！？クロノ！！』

「なんであんなに必死なのあの人・・・？」

『まあ、通信と音声は妨害してましたが、映像は伝わってましたからねえ・・・母親としては息子が死にそうになる映像はきついものがあるでしょう。』

「あ、そういうコト？でもちゃんと非殺傷にしてたよ？俺はそこんところ抜け目ないからね！」

『でも、あの493821発中12発は殺傷モードでしたよ？』

「そう？でも生きてんじゃない？いいつしょ？」

『良いわけじゃない！！』

「うおっ！！！？誰？」

「桜花君、話し聞かないと駄目だよ？」

おや・・・フェイトは逃げたみたいだねえ・・・それになのはも何かし

ら説明を受けたようだね・・

「ふゝん・・とりあえずあれだろ？管理局に連れて来いみたいなもんだろ？」

「え、なんで！？よくわかったね・・」

『・・まあ、いいわ治療も戦闘中にしていたようだし・・それで来てくれるかしら？』

「えゝ・・だが断る！」

「え・・一緒に行こうよ・・」うるうる

なのはがうるうるした涙目で俺を見ている・・しかも上目遣いと来た。

ま、最初から行くつもりだったんだけどね

「ん？いいよ」

「やった♪一緒なの♪」

・
・
・

艦内

で、管理局内に転送された俺こと桜花君です。

「来たよ！んじゃあそぼあそぼ」

「ああ、それじゃ公園にでもーって違う！！」

「クロノ君的には公園がブームなんだね！意外と可愛いところがあるじゃないか」

読者達よクロノ君は公園が好きみたいだよ！！！！

「ちがつ・・・なんだ君達！その温かな眼は！母さんまでそんな眼で見ないでください！！」

「クロノ・・・こんど遊園地にでも行きましょうね・・・」

「クロノ君・・・」

「クロノ・・・」

あ、ちなみにユーノくんはもう人間の姿に戻ったよ！その際女性陣から淫獣として冷やかな目線で見られたけどね
とりあえずクロノ君と同じ目に会ってもらったよ！

「それで・・・本題に入りましょうか。まずなぜ貴方達はロストロギ

ア、ジュエルシードを集めていたのかしら？」

そんなこんなでリンディさんが本題に入る。

「あの・・・ロストロギアってなんですか？」

「過去に何らかの要因で消失した世界、または滅んだ古代文明で造られた遺産の総称だよ。ジュエルシードもその一つなんだ。」

とユーノがロストロギアについてなのはに説明する。

「へっ・・・」

とそういった後、ユーノが自分の出身世界とジュエルシードへの関係、なのはとの出会いやその経緯を話す。

「・・・それで、僕が回収しようとして・・・」

「そう。立派だわ」

「だが無謀でもある。」

「うう・・・」

一旦、リンディのほめ言葉で喜ぶユーノだったがクロノの言葉でま

た落ち込むユーノ

「ははは、回収の遅れた管理局がなにをいつてるのやら」

「うぐっ・・・た、確かにそうだが・・・」

「それはすまないと思っているわ・・・それで、ジュエルシード回収に関しては管理局が全権を持ちます!」

「え!？」

「え・・・!？」

「ふうん・・・よし、帰ろうなのは、ユーノ。管理局がなんか全部やつてくれるんだって!行こ!」

そして、その言葉を聞きなのはとユーノが驚くが桜花は二人の手を取り転送装置のもとへと歩いていく。

「お、桜花君!？」

「ま、待ってくれ!あれはぼくも回収を手伝いたいんだ・・・!」

「黙れ・・・良いから早く着いてこい・・・こんなクソの集まりに手を貸すことはない、今まで通りやる。」ぼそっ

そう桜花にささやかれ、ユーノとなのはは困惑するが手は掴まれてるためどんどん引つ張られていく。

「まあ、待つて。」

とそこでリンディに呼びとめられる。

「……なんだい？そっちが全部やってくれるんでしょう？」

「っ……そうだけど、急に言われても心の整理がつかないでしょう？また明日ここにきて話しましょう？」

『ふん……』

ズドドドドド！……！！

と桜花の口調が某過負荷調になり、リンディの体に数本の大きな螺子が捻子込まれる。

「がっ……はっ……」「ずるずる……」

リンディは壁に叩きつけられ、引きずるように座り込む。

『あはっ、会話中なら攻撃されなかった？』

『自分の陣地なら攻撃されな
いと思った？』

『僕がまだ子供だから油断してた？』

『なのはやユー』

ノの気持ちを考えて丸めこめると思った？』

『あめえよ』

桜花は突き刺さる螺子を引き抜く。

「？」

なのはには認識阻害魔法でこの光景が見えていない。普通の光景に見える。

「なっ・・・！？桜花・・・！？」

「母さん！母さん！！！」

クロノがリンディに呼び掛ける。

がそんなのに構わず桜花は全ての螺子を引き抜いた。

『が』『その甘さ、嫌いじゃないぜ』

と次の瞬間リンディの怪我や周りの血が無かったことのように消え失せる。

「な・・・なにが・・・？」

「正直に言ったらどうです？手伝ってくれと。自分の有利な状況を作ろうとするな。いいか俺達が手伝ってやるんだ、はき違えんな・」

「っ！！？・・・そ、そうね・・・すまなかったわ、ジュエルシード回収の為に私たちに手を貸して下さい。」

なのはの認識障害を消す、だが今の願いは聞こえていた。

「はい！よろしくおねがいします！-」

「・・・よろしく願いします。」

ユーノとクロノは今の光景が信じられず俺を睨んでいる。・・・まあ、どこ吹く風なわけだが

「いいよ 手伝ったげる。じゃあ、また明日集合でいいかな？」

「ええ、親子さんにも許可を貰わないとね？」

「・・・はあ・・・分かった明日はぼくが迎えに行くさっきの公園に来てくれ。」

「はい-」

「はい！（桜花？あとで話を聞かせてもらつよ？）」

「（ん？うんいいよまたあとでね。）」

「では決まりですね。クロノ、転送装置の準備を」

「はい、じゃあこっちの此処に乗ってくれ」

三人で指示に従いそこに乗り込む。そこで俺は振り返り。

『じゃあ、また明日とか』

転送された。

・

・

・

「んじゃ、さっきの事について話そつか？ユーノ？」

「桜花……君は一体……」

——
一体、なんだ？

その言葉に桜花は不敵に笑う・・・

桜花君のKYフルボッコ 2（後書き）

あれ？なんか変な雰囲気になったぞ？

次回にはこの雰囲気を元に戻すぞ！

桜花君の肩すかしのネタばらし♪

どうも、桜花君です。前回、リンディさんとクロノを肉体的かつ精神的に追い詰めてみたよ！

で、結果的にはこっちの有利な立場で協力関係になりました！なんかそれでユーノに問い「桜花・君は一体・・・なんだ？」ちよっ・・・地の文がまだ続いてるでしょ！！

「・・・・ニコッ」

「・・・・ツ・・・君は・・・！」

「ああ、俺が何者かって話だっけ？」

「・・・そうだよ・・・君は始めから訳が分からない・・・いきなり現れたと思ったら、変な力でなのはを治療するし・・・またいきなり現れたと思ったら、協力したいと言いだす。おまけにさっきの管理局でのやりとりだ・・・本当に訳が分からないし何がしたいのかもわからない・・・」

「・・・・あれ？なのはは？」

「え？・・・・あれ！？なのは！・・・？」ぺらっ

ユーノが地面に小石で固定されている紙を見つける。
そこには、こう書いてあった。

『なんか、難しい話になりそうだから先に帰ってるね！ユーノくん

も晩御飯には帰ってきてね！ なのは『

「・・・帰ったな・・・なのはの奴・・・」

「うん・・・んん！ごほん！あー・・・まあ置いて・・・正直に答えてくれないか？君は何者で・・・何が目的なんだ？」

「ん？俺は、風華桜花だ・・・鳴海で生まれた魔導師の才能をもった男だよ？で、まあ・・・これ言ってもいのかな・・・？まあいつか俺は一京以上の希少能力レアスキルを持ってるんだ」

「一京ツ・・・！？そんなツ・・・！！？」

「目的は？・・・ん？・・・目的ねえ・・・」

「・・・？」

「目的って言ってもこれと言ったものないよねえ？イカロス？」

『ですね。マスターは基本考えなしですもんね』

「ええ！？」ズルツ

この桜花の発言にユーノは肩透かしを喰らい、こける。

「目的ないんかい！！」

「ないな！あえて言うなら・・・暇つぶしかな？」

「暇つぶし！？ジュエルシードはいらないの？これ聞くのなんだけど！」

「ジュエルシードねえ・・・ふむ」ひよい

桜花は、どこからかジュエルシードが5つほど入った瓶を取り出す。

「それはっ！？・・・ま、まさか！？」

「ジュエルシードならもう持ってるしねえ・・・ん？どうしたユーノ？」

「あのなのとは対峙した思念対発動したジュエルシードの時・・・お面の子は全てのジュエルシードを持ってた・・・」

「あゝ・・・それ俺だわ。言っとジュエルシードまたばらまいたのも俺。」

「・・・はあ・・・もう君には呆れるよ・・・」

「おいおい、ユーノ？そこで諦めるなよ？前向きに行こうぜ、考えみる。今お前と協力関係に居る俺が、お前の求めているジュエルシードを5つも持つてるんだぜ？」

「じゃあ、それを譲ってくれるの！？」

「だが断る！！」

「なんでさ！？」

「なぜならそっちの方が面白いから（某はかせ風）」

「はあ・・・もういいよ・・・あーじゃあさっきの管理局のでのたちまわりはなんで・・・？」

「ああ・・・あれか、あれだあいつらの言い方を良く考えてみる。あの言い方をして明日になればなのはやおまえは絶対に協力をさせてくれと言いに行つたる？」

「そ・・・それはもちろん・・・」

「それじゃあ、向こうの思つつぶなのだよユーノくん！なぜなら向こうの思つてることがこうゆう事だからさ！」

桜花がこういったとたん目の前に大画面が現れる。

そこにはリンディの思惑を図にしたものが書いてある。

「言いか？あいつら管理局はな？今とてつもない人員不足だ。とはいっても、これは人数不足つてわけじゃない。これは能力の高い者が不足してるんだ。だから、こんな管理外世界のこんなところにいた才能あふれるのはと高い補助スキルをもつユーノに目をつけた。」

「・・・あ、そういうことか！」

「そう・・・つまりあいつらはお前らを自分達の命令を聞く立場に置いてこの事件に協力させ、今後も自由に動かせるようにしたかったのさー！」

「・・・そうか・・・だからあの時桜花は攻撃を・・・でも、だから

ってやりすぎだろ!!」

「・・・てへ」

「てへ じゃないよ!!それにその後のあれはなんだい!?怪我がいきなり治って・・・」

「まあまあ・・・殺しちゃったけどちゃんと生き返らせたからいいじゃないか!」

「生き返らせたア!?!」

「んじゃあ、またね!!」

そういつて桜花は取り合わずに去って行った。

「・・・行っちゃった・・・それにしても聞いていた大嘘憑き・・・死者の蘇生まで出来るスキルなんて・・・それに他にも一京以上のスキルがあるなんて・・・まるで、歩くロストロギアじゃないか・・・うん、敵にはまわしたくないな・・・」

ユーノのつぶやきは風に消えた・・・

・
・
・

桜花視点

「あははは！なんかすごいネタばらしをしたけど・・・ばれてないよね？」

『はい、映像妨害、音声妨害、通信妨害、認識妨害他もろもろの結界を張りましたので、管理局にはバレていません』

「そっか、ならいつか・・・考えたんだけどさこの一京のスキルあればさ、魔法とか無しでも管理局潰せるんじゃない？」

『ですね。本局やアースラ、それに各支部で『ラフラフラ荒廃した腐花』を発動し続ければ良いんじゃないですかね？』

「・・・ま、やんないけどね？」

『それが賢明な判断です。管理局と言っても一応この存在がないと次元世界が崩壊しますからね。』

「さて・・・これから何するよ？」

『んじゃあ、プレシアン所にご飯食べに行ったらどうでしょうっ？』

「だね・・・もうすぐご飯時だしね。」

腹も空いたし、行こうかな。

「転移してくれ。」

『了解、転移!』

時の庭園

「よつと・・・」

「あら・・・桜花じゃない・・・」

そこにはフェイトとプレシアがいた。折檻していたようだ。アリシアが見てることから痣や怪我の残るものではないようだ。

「えと・・・母さん? どうして・・・?」

「どうした? フェイト?」

桜花はフェイトに近づき頭に手を乗せる。

「ふむふむ・・・ああ、なんかいつもと折檻の勢いが違うから困惑してるのか。」

「えっ!?! なんで・・・って桜花?」

「そーだよ。桜花君だよ。」

「おおおおおお桜花!?! / / / / /」

「そーだよ。桜花君だよ」

「本当に・・・桜花？／／／／／／／／」

「そーだよ。桜花君d「その辺にしなさい。何回続けるの!？」あはは」

「・・・あれ？でもなんで・・・？」

「そうね・・・なんでここに来たの？」

「いや皆でご飯でも食べようかなと。」

「ああ・・・まったく・・・いいわよ、来なさい。」

そう言っつてプレシアちゃんが奥の部屋に入ってく。

「・・・母さん・・・」ほそつ

んん？なんかフェイトが落ち込んでるぞ？一緒にご飯食べたくないのかな？

「どうしたフェイト？」

「い、いや！なんでもないよ！・・・そ、それじゃ、私は帰るね・」

くるりと踵を返して出ていこうとするフェイト、アルフもフェイトに寄って来る。あれ？なんで出てくの？

「待てよフェイト。なんで出てくの？」

「え？だって・・・もう母さんに報告は」

「そうじゃなくて、なんでご飯食べるって言うてんのに帰るの？」

「え？だって桜花と食べるんじゃない？」

「ああ・・・もういいやオラこっち来い。」

「ふええ！？／＼／＼／」

俺はフェイトをお姫様だっこして奥の部屋に入る。

「あら遅かったわね桜花、フェイト。ほらアルフも来なさい、桜花の料理はおいしいわよ。」

「はやく！フェイト！」

「・・・え？母さん・・・？えと・・・その子は・・・？え？」

フェイトは凄く困惑している！どうしますか？

決まってる。このままにも教えずにご飯食べる。

「フェイト？ほら此处座って！」

「あ、うん・・・」

俺はフェイトを隣に座らせる。前にはプレシアとアリシアが座っている。

「んじゃいただきます。」

「いただきます／まーす!」

「え．．いただきます．．」

そうして食べ始める4人+1匹

「あ．．おいしい。」

「おいしー!!」

「ふふふ．．まだまだなプレシア．．」

「くっ．．この漬物なら．．!!」

「なら俺はそれに対してこの卵焼きを出すぜ!」

「フェイト!アリシア!どっちがおいしい!?」

「え?うん．．むぐむぐ．．あ、桜花の方が．．」

「お兄ちゃんの方がおいしい!」

「．．．．orz」

「諦めるプレシア．．俺の．．勝ちだ!」

．．．それにしても．．フェイトはまだアリシアには会ってないの

か？

「フェイト。フェイトっアリシアと会ったって初めて？」

「え？うん。えと・・・？」

「この子はアリシア。言いづらんだけど・・・お前の姉にしてお前の素体だよ。」

「え・・・？素体って・・・？」

「いいかフェイト。よく聞いてくれ。お前は、いわばクローン人間だ、そして元となった人間がこのアリシア。つまりプレシアの娘だ。」

それから俺はプロジェクトフェイトの事、アリシアの死、プレシアの目的の事を全部話す。

「そ・・・そんな・・・あれ？でもアリシアは生きてるよ？それじゃジュエルシードはもういいんじゃない？」

「うん、アリシアは俺が生き返らせた。ジュエルシードはお前達親子が犯罪者にならないために集めてるんだよ。」

「そうなの？」

「ええ、そうよフェイト。いままで悪かったわね・・・これからはアリシアとフェイト・・・仲良く三人で暮らしていきましょう・・・ダメかしら？」

「いや！だめじゃない！私も・・・母さんや・・・ね、姉さんと暮らしたいです・・・」

「良かったなフェイト？」

「うん！ありがとう！桜花！」にこー

おうふ・・・フェイトの笑顔が眩しいぜ・・・

「あんた・・・いい奴だねえ・・・ぐす」

アルフが泣いていた。なぜ泣くんだ、良い結果じゃないか！

「はあ・・・んじゃ、引き続きジュエルシードをよろしく。管理局の協力者になったから形式上はお前らの敵になる。でもお面付けてる俺はお前らの味方だからよろしく。・・・あ、お面の時は・・・そうだね・・・ライアーと呼んでくれ！」

「あら・・・もう帰るの？泊まって行ったら？」

「いやでも・・・ん？」くいくい

アリシアとフェイトが俺の袖を掴んでいる。

「どうした？フェイト、アリシア？」

「その・・・もう少し一緒に居たいな・・・／／／／／」

「泊まらないの？・・・」うるうる

ぐはっ！！フェイトの上目使い攻撃＋アリシアの涙目攻撃がクリティカルヒット！！！！

桜花君に９９９９９９の精神ダメージ！！！！

「分かった・・・泊まらせてもらっよ。」

「やった！」

「じゃあ今日は一緒にお風呂に入ろう！お兄ちゃん！」

「それは駄目よアリシア！」わたわた

ははは、忙しくなりそうだな・・・

その後、お風呂に真っ赤になったフェイトと笑顔のアリシアが突撃してきたり、布団にアリシアが潜り込んでいたりと事件が勃発したのは別の話

桜花君の肩すかしのネタばらし♪（後書き）

くそ！桜花め！二度もフェイトとお風呂に！あげくアリシアまで！！

次回はなのはとフェイトの決闘です。桜花君の介入は・・・

桜花君の殲滅封印砲と嘘だらけの供述（前書き）

ん・・・今回から。。。」「形式をやめようと思います。
。。。の部分消して台詞のみ。
なんかそっちの方が他の小説にも多用されてるしね！
さあ頑張ろう！

桜花君の殲滅封印砲と嘘だらけの供述

はい、桜花君だよ！今は라이어ちゃんだよ！プレシアの家で過ごして約一週間！

フェイトとなのは達管理局は各々ジュエルシードを手に入れるために探していました。俺？お面の時は魔法、素の時はレアスキルと使い分けて手伝ったよ？んで、急にみつから無くなってフェイト側は残りが海にあると判断して強制発動させることにしたんだ

「アルカス、クルタス、エイギアス……ぶつぶつ……」

アルフが心配そうにフェイトを見てる。これも原作通り、おそらく管理局も見てるんだろう。

ちなみに今の俺はフェイトの隣でアルフ同様に待機してます。もちろんお面付き、NARUTOの世界で手に入れた影分身を使ってなのは達の元にも分身を置いてます！

「はあああああ！！！！！」

ピッ
シャ
アア
アア
アア
アア
アア
アン
!!!!!!

魔力の電撃が海に叩きつけられる。

「見つけた……！！残り……6個！！」

「フェイト、大丈夫かい？いくらなんでもこれを封印なんて今のフェイトじゃ無理だよ……!!」

「案ずるな！アルフよ。そのための俺様だぜイ！」

「え？」

はははよくわからないって顔をしている。ココからは俺の独壇場。つまり俺が封印するってことだよ

「イカロス！行けるな？」にやり

『もちろん。』

イカロスと俺は不敵に会話を交わす

「んじゃ・・・イカロス！大規模広域殲滅砲撃魔法！セット！」

『了解！広域殲滅魔道砲、タイプ^{アルファ}alpha！』

イカロスがそういうと、フォームが変わる。

光に包まれたイカロスが姿を現す・・・それは、桜花の腕に装備された大太刀。

まあ、ぶつちやけると某死神の使う最後の月牙。衝の状態？

「こ、これは・・・ライアー・・・なの？」

フェイトはそう問いかけてくる、姿が大きく変化していたからね。今の俺は深い青色だった紙が漆黒に染まり腕の大太刀は黒い魔力が渦巻いている。瞳も黒くなっている。

「なんだい・・・？その状態は・・・それもアンタのレアスキルなのかい？」

アルフがそう言う、俺は軽い調子で言う

「そ。イカロスの3つあるモードの一つalphaタイプ、広域殲滅を司るモードだよ」

そう言うて俺は上空高くに上昇し、ジュエルシードを見据え・・魔力を大太刀に込める。

ズズズ・・・

「おっとお？あぶねえこれ以上ためると次元震起きるな。」

『気をつけてくださいよ、ただでさえ貴方は規格外なんですから・・・』

それでも1割行かないんだけどな・・・しょぼーん・・

「わるいわるい・・んじゃ行きますか！イカロス、チャージは完了した・・行くぜ？」

『了解・・いつでもどうぞ。』

俺は魔力のこもった大太刀をふるう、するとその剣圧で衝撃が起こり海が斬れる、すぐに元に戻ったけど。

「・・・ふっ！！！！！」

ブン!!!!!!!!!!!!!!

「イカロス type ” Alpha ” 大規模広域殲滅魔法『無月』発動。」

桜花が大太刀を振り下ろした瞬間
前は漆黒に包まれた
目の

・

・

・

アースラ

・・・フェイトが強制発動をさせた頃・・・

「すごい子ねえ・・・」

リンディがそう言う。桜花君はもちろん静観してるよ　だって分身だもん！

「だが無謀すぎる！」

画面にはフェイトが疲弊した様子が見える、それを見たなのはが言った

「あの！私、フェイトちゃんの所へ行きます！」

うん、良い判断だと思います。でもねKYは空気を呼んではくれないんだよ！

「いや、行く必要はないよ。」

「え？」

「このまま監視して疲弊したところを叩けばいい。」

「そんなっ！！」

いい加減このKY野郎は調教しないと駄目かな？なのは式のOH
ANASHII！でも良いけどさ♪

「残酷に見えるかもしれないけど、私たちは常に最善の判断をしなければならぬの。我慢してください。」

リンディがそう言う、だがかし！そうは問屋がおるさんよ！！！
だろう？わが本体よ！

「無駄だと思うけどなあ？あのお面の奴が凄いことしてるけど？」

そういつてやると皆が画面を見る、そこにはイカロスを解放した本体の姿。

「なんだ！？あの姿は！！」

「艦長！あのお面の子の魔力反応！どんどん大きくなっていきます！推定測定値・・・測定不能です！！」

クロノが驚愕し、エイミィさんが報告する。

「つまり・・・EXランクってわけね・・・？」

「EXランクなんて・・・そんな・・・馬鹿な・・・」

クロノがなんか驚いてるけど知らない。

「お？なんか大技出すみたいだよ？」

——『イカロス type "Alpha" 大規模広域殲滅魔法
『無月』発動。』

その台詞が画面から聞こえると共に画面は黒く染まった。

・
・
・

「やた ふーいんかんりょー」

「いやいや！やりすぎだろ！！」

「あれ？でもなんで私たちは無事なの？巻き込まれたんだはずなんだけど・・・」

「それはだなフェイト！この技は自分が敵、または障害と認識した者にしかダメージを負わせないのだ！だからフェイト達は無事というわけなのです」

「本当・・・規格外だね、桜k・・・ライアーは・・・」

フェイトが呆れている。おいおい本気出したらこんなもんじゃないんだぜ？

「おいおい本気出したらこんなもんじゃないんだぜ？」

「アンタ、声が漏れてるよ」

「本当・・・規格外だね、라이어は・・・」

ははは・・・おや？どうやら管理局が来たようだ。

「そこまでだ！君たちを次元犯罪者として逮捕する！」

さて、ここからが本番だ。

時の庭園

「さて、終わったわね・・・行きましょうアリシア」

「うん・・・大丈夫だね？フェイト・・・」

「大丈夫よ・・・桜花がついてるから。さあ行きましょう」

私達はこれからこの時の庭園を消滅させてフェイト達と一緒に管理局の元へ行く。

桜花からの合図が先程届き、今はもう崩壊させる準備も整い出発するところ。アリシアはフェイトが心配みたい。

「お母さん・・・ぎゅ」

「大丈夫、大丈夫よ・・・じゃあ行くわね、転移魔法発動・・・!!」

・

・

・

「そこまでだ！君たちを次元犯罪者として逮捕する！」

「いーよ」

「抵抗するなら・・・え？」

「いって言ったんだよKY。あ、ちょっと待ってね。あ、来た。」

ピカッ

光ったと思ったらプレシアとアリシアが転移してきた

「タイミングばっちりだね。プレシア」

「ええ、ちゃんと見てたもの」

「お兄ちゃん・・・」

おう・・・アリシアは不安そうだね・・・

「大丈夫。俺がここにちゃんという。」

「あの・・・私たちはどうすればいいですか？」

フェイトが話を進める、クロノは一瞬呆けていたが気を取り直した

「あゝ・・・とりあえずアースラへ来てもらう。ついてきてもらう・・・艦長。」

『ええ、転移装置作動。アースラへ送還！』

・

・

・

「つと・・・」

無事にアースラへと来れたみたいだ。

「つ・・・」ぎゅ

「アリシア、おんぶしてあげる。ほら乗って。」

アリシアは不安が積り泣きそうになっている。ここは安心させるためにも人の温もりを与える。

「うん、えへへ・・・」

「うんうん、多少は緊張も解けたみたいだね！大丈夫、俺が守るから大丈夫だよ。」

「あゝ水を差して悪いが・・・そろそろいいか？艦長の元へ案内するから付いてきてくれ。あ、武装は解除してくれるか？」

む・・・このKYが・・・お前のせいでアリシアがビビってんだろぅが・・・
ったく・・・

そう思いながらもバリアジャケットを解除する。
で、しばらく歩くとある部屋につく。

「ここだ。じゃあ、入ってきてくれ。」

「うーす。おっじゃまっ」

「おじゃまします」

「おじゃまするわ」

上から俺、フェイト、プレシアだ。誰が一番行儀がいいか分かる？俺だよ！・・嘘です。多分フェイトです。

で、中には分身の俺、なのは、リンディ、エイミィをはじめとする局員方がいてこっちを見ている。

「・・初めまして、アースラ艦長のリンディ・ハラウンです。」

「あ、ども。라이어って偽名名乗ってます。よろしく」

「フェイト・テストロッサです。こっちは使い魔のアルフ」

フェイトが俺に続いて言う、アルフも軽く頭を下げる。

「プレシア・テストロッサよ。라이어の背中に居るのは娘のアリシア・テストロッサよ。」

「そうですか、ではお話を聞きたいのですが。よろしいですか？」

「ええよ」

そこから事情聴取が始まった。

「まず、なぜジュエルシードを集めていたのですか？」

「え？そ．．それをお前らが聞くのか．．！？それを．．お前らが．．き、聞くのか．．！？」がくがく

「え．．ええ？それが．．なにか．．？」

無駄に壮大そうに反応する俺。リンディ達管理局側は息をのんでいる。フェイト達は内心呆れている。

「それは．．．．」

「それは．．？」

「慈善活動だよ」

「ええ！？」がくつ

リンディ達がずっとける。面白い．．w

「ためた割にはさらっと言ったわね・・・」

プレシアがため息を吐いてそういった。

「ごほん・・・ええと、それはどうゆうことですか？」

「なんかな？ ジュエルシードがあっちにばらまかれたじゃん？ なんか事故って？」

「ええ・・・」

「で、その事故をプレシア達親子はまあ、偶然知ったんだよ。」

「ふむふむ・・・」

「で、ロストログアが21個も一つの世界、それも一つの街に散らばってるとなれば危険だ。死人が出るかもしれない！？」

「・・・・・・」

「ヤバイよ！じゃあ、早く回収して封印しないと！！って訳で、集めてたわけだ。」

嘘だらけの説明をしてやった。するとリンディはこう返してきた。

「じゃあ、なぜ管理局の協力者であるのはさんと敵対したの？」

「そんなの怪しいからに決まってるじゃないか」

だが一蹴する俺！！

「怪しい？」

「そ、だつて始めは管理局でもなんでもない魔導師がさ？ 訳も分からん喋る動物連れてジュエルシードをよこせて言うんだぜ？ そりゃ怪しいだろ？」

「う・・確かに・・」

「そしたらよ、悪用しようとする輩かも・・と考えて迎撃したわけだ。ま、管理局の協力者と知ったのは最近だけだね。」

「そう・・じゃあ、貴方は何者？」

おお・・遂にこの質問がきたか・・だがその前に

「その前にこの話を聞いてプレシア達の身柄はどうなる？」

「ああ、多分こちらの保護観察という形になると思うわ。過程はどうあれ慈善活動だった訳だしね。次元震も起こしてないし。」

「そうか・・んじゃ俺の事は全部事後処理が終わってからにしてくれない？」

「え・・？ ああ・・まあ・・いいでしょ。それじゃあクロノ、報告書をお願いね。」

「はい」

とそう言っ
てクロノは報告書を作り
に部屋を出ていった。
さて、こ
っからはなのはとフ
ェイトのお友達フラ
グを立てねば！
分身！行けるな？そ
う目で分身に指示を
出す。了解の意が帰
ってくる。

分身視点

本体とアイコンタクトを取った後なのはに話しかける。

「なのは、フェイトと話があるんだろ？行って来いよ。」

「え？あ！うん！行ってくる！！」

なのはがフェイトの元へ駆けよる。

「あ、あの！フェイトちゃん・・・」

「あ・・・あの時の・・・」

頑張れ！なのは！！

「あの・・・あのね！わたし・・・いろいろ考えたんだけど・・・フェイトちゃんの友達になりたいんだ！」

「え・・・？えと・・・その・・・！」

フェイトがわたわたししている。
そこに本体のフォローが入る

「ああ、じゃああれだ。フェイトとお前で勝負してみればどうだ？ちゃんと決着も付いてないだろ？」

ナイスだ、本体！

「あ、そう・・・ですね！フェイトちゃん、私と勝負してくれる？最初で最後の・・・本気の勝負！！」

「えと・・・え？」ちら

本体を伺うフェイト。

「フェイト、やってやれ。全力で勝負したすれば・・・きっとお前も始められるはずだ。」

「・・・うん・・・やってみる！」

そうして、フェイトとなのはの決着をつける勝負が始まる。全てを最初から始めるために。

鳴海市、海上

「いいか？勝負は基本自由。相手をノックアウトさせた方の勝ちだ。」

「うん！」

「分かった・・・」

なのはとフェイトがうなずき、俺は勝負開始の合図を出す。
いつまでシリアスモードしないといけないんだろ・・・

「んじゃ・・・始め！！！」

と同時に、両者が空へと翔けて行った。

桜花君の殲滅封印砲と嘘だらけの供述（後書き）

あ、言い忘れてたけど。

描き終えたら挿絵を更新していきます。

一話に一枚くらいね！

桜花君の決闘放置♪と無印の終わり。（前書き）

なんかなし崩し的に終わる無印

A、S 編じゃ、もうちつと読みやすく物語になつてる奴を作ります。

あと、主人公設定を多少変更しました。

桜花君の決闘放置♪と無印の終わり。

はい！桜花君です。前回、始まったのはとフェイトの決闘ですが・

今、全力でスルーしてます 「デイベインバスター！」で、今皆とお茶してます「プラズマランサー！！」・・・結構長いな
まだ分身は解いてませんぜ！

「あ、リンディさん。決闘が終わるまでにいろいろ話を終わらせときましょう。」

俺は、さくさく進めるためにリンディに話しかける。

「え？ああ・・・そうね。じゃあいろいろ聞かせてもらおうかしら。」

「はいどーぞー。」

もうなんかだるいなあ・・・早く終わんないかな

「まず・・・貴方の本名は・・・教えてくれないわよね。」

リンディが苦笑しつつ言う

「え？風華桜花です。」

だが、もう本名は隠す必要はなし。さらつとばらす俺！

「ああ、桜花・・・ってばらすの！？ん？桜花君！？」

お面をはずしてみる俺！

「ばあ」

「・・・じゃ・・・じゃあそこに居る桜花君は・・・！？」

ポンッ！

分身が消える。それを見た周囲の管理局側の人達が目を見開いている。

「えと・・・それは？」

「忍術！」キリッ

「ああ・・・もういいわ。それじゃ・・・あの力は何？みたところかなり危ないものだけど、それにあの力は貴方にとってどの程度の技なの？」

俺の力について聞いてきましたねえ・・・ま、いいか。どうせ解析何ぞ出来ないわけだし

「あれ？魔法です。俺にとっては・・・んゝかなり高位の技だね！！」
ぐっとサムズアップして言う俺。

「そう・・・なら安心したわ。じゃあ次になんでフェイトさん達に強

「おう、なのは。勝ったんだね、おめでとー」

「うん！フェイトちゃんとこのあと少しだけ話せるんだって」

「そっかそっかーよかったねー、きっとフェイトもー良い返事をー返してくれると思うよー」。

「・・・あとでO H A N A S H I・・・いい？」

「よくねえに決まってるだろ頭おかしいんじゃないの？」

「やっぱりO S H I O K Iなのー！ー！ー！」

・

・

・

はい、今現在あの無印最終回でフェイトとなのはが百合百合してた場面です。俺は今その場面に立ち会っていて、橋の手すりに寄っかかったそがれてます！すぐ後ろじゃフェイトとなのはの会話・・・さて、どうしようかな『茶化してみてはいいか？』それがいいかもね、俺らしくて

「私・・・どうやったら友達になれるのか・・・わからないんだ・・・だから教えてほしい・・・どうやったら君と友達になれる？」

「・・・簡単だよ・・・友達になるのすごく簡単。・・・名前を呼んで！君とか貴方とかじゃなくて、名前を呼んで・・・始めはそれでいいんだよ・・・私は、高町なのは、なのはって呼んで！」

「なの・・・は・・・？」

「うん！うんうん！！！」

「なのは」

「フェイトちゃん！」

「なのは！！！」

「フェイトちゃん！！！」

あゝあゝあゝあゝあゝ！！！！百合イイイイ！！！！かゆいぞ！背中が！！！！

「これで、私達もう友達だよ！」

「そつか・・・ありがとうなのは・・・桜花・・・君とも友達になれるかな？」

「・・・」

「え・・・？ダメなの・・・？」うるうる

「いや・・・駄目じゃないんだけど・・・俺はもうあれだよ？友達だと

思ってたんだぜ？なのにフェイトはまだ俺を友達とってくれてな
いって……ズーン……」

「え！？いや！あの……！その……ごめんなさい……桜花はもう私
の友達だったんだね……ありがとう……／／／／／」

「わたしもいれてー！！！！！！」ずしゃああ！！

「げぶほづばあああああ！！！！」

アリシアのタックルが鳩尾に入り、俺は吹き飛んでいく。

・
・
・

「チーン

「えと……ゴメンネ？お兄ちゃん……」

「キニシナイデ……アリシアハ……ナノハタチト、トモダチニ、ナ
ッテ……オイ……デ……」ガクッ

「「「桜花^{くん}／お兄ちゃん！！！！！！！！！！」」」

・
・
・

まあ、効かないけどね タツクル程度・埃が体にぶつかるほどの
衝撃も無かったよ！！！！無敵だね！！！！

「じゃあ、フェイト。母ちゃん達と達者で暮らせよ？」

「うん！いろいろありがとう！！桜花！！！！」

「ばいばい！！お兄ちゃん！！」

そう言つて去つていくフェイトとアリシアの笑顔はとても可愛らし
い年相応の純粹な笑顔だった。

やがてフェイト達は転移で去つて行った。

「行つたねえ・・・じゃあ、俺は帰るわ。」

「あ、うん。桜花君、今回はありがとうなの！」

なのはも淫獣と共に「淫獣じゃないよ！！」帰って行った。

『A、sまでどうするんですか？マスター？』

イカロスが聞いてくる。確かにA、sまでは時間がある。今は多分10月頃だと思っから二期の時期まで2カ月も間がある。

「とりあえず、学校行って平和にすごそう。A、sには極力干渉しないようにしようぜ？なんかさー俺が無双出来るとこなかったじゃん？無印・・・つまらないぜ？ってことで今から図書館行こうぜ！」

『行ってることが矛盾してますよ？マスター？』

そこから俺の原作無干渉作戦が始まった！

『いやもうガンガン関わろうとしていますよ？』

「まじでー！ー！？」

桜花君の決闘放置♪と無印の終わり。(後書き)

はい、次から日常編です。

二期の主人公設定（前書き）

少しだけ改定します。

二期の主人公設定

ある読者さんが桜花君の能力がドン引きするほどチートという指摘をくれました！

確かに少しやり過ぎかなと思い、少し世界観に合わせて各々封印することにしました。

まず、なのは世界での禁書能力の封印。

えーこれは超能力、魔術、幻想殺し。原石の能力を文字通り、なのは世界で使えなくします。

で、次に、ナルト世界の忍術の封印

えー、一期の方で一度だけ影分身を使ってますが二期以降は使えません。

まとめると

桜花君

9歳

男

150cm 50kg (9歳の段階で)

青みかった黒い髪に青い瞳、ルックスは上の中

身体能力、才能は改定した初期主人公設定を少しあげた程度だから
ほぼ同じ。

能力

めだか世界の異常・過負荷全て

あらゆる力を操る程度の能力

ブリーチの死神化、虚化、鬼道。フルブリングは封印

空を飛ぶ程度の能力

境界を操る程度の能力

見た技術（魔法や忍術、死神化等もこれに入る）を習得する程度の
能力

こんな感じです！これでもかなりチートですが、よろしく願います！

二期の主人公設定（後書き）

まあ、こんな程度の改定です。これ以降は改定はあんまりないと思いますが、追々主人公設定は出して行こうと思います。

二期・・・始動!!（前書き）

ちなみにフルブリングは使えませんが、それ以外のブリーチの能力は使えます！

二期・・・始動！！

どうも桜花君です。

前々回、一期を終えたんですけど、なんかおかしいことになってます。

えゝ皆さん分かるか分からないんですけど。二カ月もの暇は結構きついですよ。

まだ一ヶ月足らずしか経ってないけども！でそんな中、出ましたよ・・・何が出たって？

「転生者ですよ・・・」

「どうも！俺の名前は中条 慧です！よろしくな！！」

と言うことで、俺の目の前で自己紹介している転校生の銀髪オッドアイの馬鹿。

魔力は隠してるようだけど容姿・喋り方・女子の異常な反e t cそして何よりつい先日会得した読心術で分かった。

こいつの心の中はこうだ『なのは達は俺のもんだぜ！ハーレムやつほおおおお！！！！』って感じ♪

ハハハ、馬鹿みたいだ。でも何故か知らんがアリサとすすかとなのはがなんか顔をしかめてる何故だ？なのはに念話で聞いてみよ。あいつには聞こえないように。

『なのは、どうした？顔をしかめて。ついに頭がイカれたか？』

『イカれてないよ！！』

なのはが念話で憤慨する。

『分かった分かった。で、どうしたよ?』

『うん、あの転校生の子なんだけど三日前くらい前から翠屋に来る男の子なんだけど・・・』

『うん、お客さんじゃないか』

『だけど・・・あの子、私のことをじ〜と見てくるの・・・なんか嫌な眼・・・っていうか。』

『へー』

まあ、分かるけどね。奴の思考を考えれば。

『それで・・・アリサちゃんやすずかちゃんが居合わせた時は二人の事も見てくるの・・・』

『ふ〜ん・・・』

どうやらガチのストーカーのようですよ。ま〜・・・どうでもいいんですがね

そう思い念話を切る。

「じゃあ、慧君は・・・あそこに座ってね?」

とその転生者なのは達とは少し離れた場所に座った。俺?なのはの隣、すずかの後ろ、アリサの前の位置です。この前席替えした結果そうなった。悪意を感じるね・・・寝れないじゃないか!!! 以上に

も寄ってこのメンツは酷いじゃないか!!

「じゃ、授業をはじめるね」

と授業が始まる・

・

・

・

で、昼休み

「よっ！なのは！偶然だな!!」

ここぞとばかりにやってくる転生者A君。

「う・うん。よろしくね・中条君・」

なっ・・！？あなのはが名前を呼ばない!!？なんて奴だ中条君！

「んで？オマエ誰？」

うわ俺の方に来た・・なのは、アリサ、すずかよ、なぜどうにかしてと言っ眼で俺を見るんだ・・

「えゝ・・俺に来るのか・・んじゃ聞こつオマエ誰？」

「なっ・・・オマエかなりうぜえ奴だな!!」

うん、お前ほどじゃないと思う。

「いいからさっさとしてくんない？俺腹減ってんだよ、飯食いたいたいだよ、さっさと此処から去りたいんだよ、だからさっさと消え去れくたばれいなくなれ、出来れば俺の前にもう姿を現すなめんどくさい」

と言って俺はそのまま教室を去ってみた。

去り際に見えた中条くんの真っ赤に染まった顔が印象的だったね

・

・

・

中条視点

おす、俺は転生者だ。

訳あってリリカルなのはの世界に三日前に来た。

神様がミスったみたいで一期からと頼んだのに二期からのスタートになっちゃった・・・

だがしかし！この俺のチート能力を持てすれば！ハーレム何ぞすぐに作れる！目指せ！俺の美少女ハーレム!!!!

ちなみに俺の貰ったチートは無限の剣製・魔力ランクSSS・大嘘憑きの三つだ！

この力があれば、オリ主決定だろ！！フハハハハ

……だが、あのイレギュラーは邪魔だな……消すか……

●

●

•

桜花視点

ぶるる！なんだ、今へんな悪寒が・・・？

まいつか。さつき見た感じじゃあの中条君が持つ魔力ランクはSS
S、それにリンカーコアとは別の魔力を感じたからあれがFate
の魔力回路ってやつか。・つまりは無限の剣製ももってるだろうな
・
・でも。・なんか一つ過負荷を感じたね。・なんだろう。・

安心院さんなら簡単にわかるんだろうな。・大嘘憑き？不慮の事故？致死武器？・分かんない。

「ま、どーでもいいけどね。二期は関わるつもりもないし？」

「あ、桜花君ちよつといい？」

おりよ？先生が話しかけてきた。

「なんですか？」

「あのね、この学校の蔵書図書がねちよつと増えすぎちゃったみたいだね。」

「はい」

「それで、近くの鳴海図書館に届けてほしいのよ。ほんの4、5冊ほどだからお願いできない？」

「んゝええよゝ」

何も考えず引き受けた。

「よく考えたらあれじゃん。はやてと出会うフラグじゃんこれ」

何も考えずに引き受けたけど・・・二期フラグたっちゃった・・・ん？あれって・・・ああ、中条君じゃん。

「ふむ・・・ほつとくか。」

職員の人に話しかける

「あの、ちょいいいかな？」

「え？ああはい。どうしたの？」

「この本をね？学校に頼まれて持って来たんで受け取ってくれる？」

そう言つて本を押し付け、踵を返す。

その先には。

「んー！！んー！！！！とれへん・・・おっしや！関西弁の美少女の本気見せたるわ！」

はやてちゃんがいました。およ？回こつには中条君がきよろきよろしてる。あ、職員に連れてかれた。

[illegible]

去って行った。
・
・
はあ仕方ない。

「ほれ」

「あれ？」

「これか欲しい本は？」

はやてに本を見せてそう言う

「あ、はいそうです。」

「そっか。じゃあ貰ってくな？」

「ええ！？流れ的におかしい！？」

「嘘だよん」

「なんでやねん！！」

ははは、それはね？俺だからだよ！！！！

「ははは、ほらやるよ。じゃあね」

「あ、まって。お礼させてくれへん？」

「お礼？」

「そつや・・・駄目？」

上目づかい、だが俺は駄目と言える日本人！

「だめー」

「えー・・・そこはええゆう所やろー？」

「んじゃ行くねー」

そう言つてはやての車椅子を押す。

「おわ！？な、なんでうちの車椅子おすねん！」

「お礼してくれるんでしょ？んじゃ家に送つてくよ。」

「この天邪鬼めー！！！！」

・

・

・

「あ、シャル」

「だれや？」

「んーうちの家族みたいなもんや」

「へー」

「あの・・・はやてちゃんその子は？」

シャルさんが話しかけてくる。

「ああ、うちが困つてるところを助けてくれたんよ。で、お礼にうちの家まで来てもらおうおもて。」

「ああ・・・それはいいですね。」

シャルさんが俺を一目して笑顔でうなづく。

・

・

・

で、はやての家。

「ただいまー」

はやてとシャルがはいってった。俺も続く

「タダイマー」

「誰だお前――!!」

エターナルなロリータことヴィータちゃんが俺に自慢の金槌を振りおろしてきた。

「きかんわ!このつるぺた幼女め!!!!」

だがしかし俺はその金槌を無刀取りの要領で奪い取る。めだかボツクスで会得した技だぜ!

「ええ!?あ、アタシのアイゼンが・・・!!」

「ははは元気がいいな!!そんな君にはこのアイスをあげよう」

「え!?あ、ありがとう!」

ふっ・・・幼女は堕ちたア!!

「じゃあ、今日は俺はやてに呼ばれてきたんだ。俺は風華桜花。よろしくな?」

「あ、ああ、よろしく・・・」

「なんや、桜花くんゆうんか。うちの名前言ってなかったな?うちは八神はやてやよろしゅうな?」

「まあ、よろしくしてやるよはやてちゃん?」

「うん!」

にこりとはやては微笑んだ。
その笑顔はともかわいらしいものだった。

やっぱり・・・原作関わらないとだめなのかな・・・ここまできたら。

「まあ、どうせ関わるまいとしても？管理局からの協力要請・なのはオハナシによる強制とかいろいろ原作にかかわらせるための展開を用意してたけどね？」

「さ、作者！・・・くそう・・・いいよやってやるよ・・・」

というわけで原作介入決定。

二期・・・始動!!（後書き）

中条慧君が出てきたよ！転生者Aくんです。
こいつも原作に関わらせるからよろしく!!

桜花君の勘違いと蒐集活動（前書き）

今回は原作が本格始動です。

桜花君の勘違いと蒐集活動

はい、どうも桜花君です。

前回出会った自称薄幸の美少女、八神はやてちゃんの家にお招きされ夕食を食べました。

で、なんやかんやで泊まることになり、朝を迎えているのが今現在です。

「うつ・・・眠いぜ・・・起きなければ、起きないと・・・エターナルなロリータが・・・ピコピコハンマーで起こしに来る・・・」

「あたしのアイゼンはピコピコハンマーじゃねえ!!」

ピコッ!!!

そんな乾いた音を立てて俺の頭に直撃するアイゼン（笑）。が効かん!!!!!!

「痛いじゃないか。それに昨日からなんだそれは？でっかくなったり小さくなったり訳が分からんぞ・・・？」

「うつ・・・べ、別にどーでもいいだろ!!おもちゃだおもちゃ!!」

ごまかしたね？ヴィータちゃん？

「ほらいいから！朝飯出来てっから早く起きろ!!」

「朝からテンション高いね。良いことあったの？」

「お前のせいだよ!!」

「ははは、何を言ってるんだこの幼女は」

「あたしは幼女じゃねー!!」

「鏡を見てから出直してこい幼女」

そんな会話をしながら俺とヴィータちゃんはリビングへ歩いていく。リビングへ着くとそこではやはりおらず代わりにシャルさんが台所に立っていた。

「どうしたヴィータちゃん。そんな青ざめた顔をして、死ぬのか？」

「あ、ああ・・・ある意味死ぬかもしれない状況だよ・・・」

否定しない・・・なんだって言うんだ・・・

「困惑してるようだから教えてやる・・・シャルの料理は・・・もはや料理とは言えないほどにマズイ・・・」

「具体的には？」

「一瞬であの世へ行けるほどだ」

「へー」

そんな料理が作れるなんて流石二次元世界だね

「良いだろう、そんなものすべて俺が食いつくしてくれる!!」

「はいできましたよー」

シャルさんがタイミングよく料理を出してくれる。
だが、その料理は一瞬で消え失せた。

「あれ？料理は・・・」

「シャルの料理が消えた!？」

「どうしたヴィータ・・・!？」

そんなやりとりの中シグナムさんがは yet を抱えてリビングへログ
イン。

はやてとシグナムさんはシャルのエプロン姿をみて顔が蒼白にな
る。

「むぐむぐむぐ・・・」

俺はその様子を眺めながら料理（激薬）を咀嚼する。

「ヴィータちゃん。俺お腹空いたよ。」

「お、おま！オマエ今シャルの料理食ったのか!？」

「食べてないよ。お腹空いたな。はやてなんか作ってくれない？手
伝うからさ」

「あ、ああ分かった。シャルそこで大人しくしといてな？」

驚きつつもはやてちゃんはシャルさんに釘をさして台所へ向かう。

「しゅん・・・」

あ、シャルさんがしゅんとしてる・・・まあ、俺の口の中今びりびりとしびれてるもんね。ヤバイよこれ。

その後、朝ごはんを食べた後皆が俺の事を信じられないようなものを見る眼で見てた。

だがスルーして学校へGO！！

「また食べに来てな？」

「まあ、食べに来てやらんことも無くも無いかもしれないかもわからないよ」

「ほんと天邪鬼さんやな」

「え？え？今のどっちだ？なくも・・・無いだから・・・あれ？」

ヴィータが困惑しているかなりおもしろい。

「じゃあ、またねはやて」

「うん、またな桜花くん」

「あ、来るのか。今ので分かった」

扉が閉まる前にヴィータがそんなことを言った。マジ幼女じゃん。

・
・
・
自宅

桜花くんだよ！今はイカロスにカートリッジ機能をつけたところだよ！

こいつマジすごいんだよ！カートリッジ無限リロードとかやばすぎ！弾丸自体も作成出来るんだって！凄いよね！

「てなわけで・・・今日の事を思い返したんだけど・・・」

『どうしましたマスター？』

「なんか・・・俺勘違いしてたみたいで・・・もうヴォルケンリッター出てきてんだからもう二期始まつてるんだよね」

『あ、今気付いたんですか。』

「オマエ知ってたのかよ。なら教えてくれてもよかったじゃん・・・」

『いえ、既にご存知かと思ひまして。』

それもそうかな？まあ、いいや。気楽に行こう。どうせ作者のせい

だろ。

『ちなみに今日ですよ？なのは襲撃事件』

「まじか？あのヴィータちゃんが問答無用で襲いかかってくる事件？」

『です。』

「えゝ・しかたない今日の俺はスナイパーだぜ！」

『了解です。では行きましょうマスター。』

そんな会話をして桜花は家をでた。身の丈ほどのスナイパーライフルを持って

・

・

・

結界内

そこではなのはが赤い騎士服をきたヴィータに襲われていた。

「くっ・・・どこの子！？なんでこんなことするの！？」

なのはは必死に問いかけるが、ヴィータは黙って攻撃を続ける。

「きゃあ！？・・・っう・・・話を！聞いてってばあ！！」

『デイベインバスター！！』

「ごおお！！」

なのはは反撃にデイベインバスターを放つ。それはヴィータの帽子を傷つけ飛ばして行く。
それを見たヴィータの目の色が怒りに変わる。

「んのやろおおおお！！！！」ブン！

「アイゼン！カートリッジロード！」

『ロードカートリッジ！』

ガシュ！ガシュ！と弾丸がリロードされ、ヴィータの魔力が爆発的に膨れ上がる。
そして形を変えたアイゼンをブンブンと振りまわし勢いそのまま突っ込んできた。

「ラケーテン！！！！」

「えっ！？」

なのはは瞬時に障壁を張る。

「ハンマー!!!!!!!!!!」

ガアアアアアアア!!!!!!!!!!

勢いよくぶつかった攻撃は勢いを失うことなくその障壁をブチ抜いた。

「おつらあああああ!!!!!!!!!!」

「きゃあああああああああ!!!!!!!!!!」

ドオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!!!!!!!!!

なのはがビルに突っ込んだ。

「はあ・・・はあ・・・はあ・・・くっ・・・」

ヴィータがなのはの元へ追撃を仕掛けようと向かった時、バインドがヴィータを捉える。

「なっ!?!なんだ!?!」

「はっはっはあ!?!そこまでだぜ!?!」

上から声が聞こえ、ヴィータが見上げるとそこには

「此処は通さないぜ！鉄槌の騎士ヴィータちゃんよお！！」

馬鹿な転生者Aこと中条慧くんがいた。

・

・

・

中条君視点

「今日はなのは襲撃事件だ。介入するぞ！ノア！」

『了解ですマスター』

こいつは俺の作ったデバイス、ノア。能力をフル稼働させて作ったすぐれものだ。

こいつと一緒に介入してなのはやフェイトに持てまくるぜ！目指せ！美少女ハーレム！

はやてもなのはもフェイトも俺のもんだ！アリシアを助けられなかったのは残念だったがな。

「なのはが吹っ飛ばされた！今がいいタイミングだ！行くぞ！ノア！」

『はい！マスター！』

そうして俺は介入する。

・

・

・

桜花視点

「あゝ・・そう言えばいたねゝ中条君。凄く噛ませ犬っぽい転生者の台詞をバンバン吐いてるよ・・うわ・・心の中まで」

俺は読心術と読唇術を行使して中条君の台詞を読み取りそうこぼした。

「なあ、イカロス。あのノアってデバイスどのくらい凄いの？」

俺はイカロス新しいモードのβ形態、身の丈ほどのスナイパーライフルとなったイカロスに話しかけた。

『はい、あれは私ほど規格外ではありません。マスターは私を造る

際にデバイスの知識を出来る限り蒐集して作ったのに対しあの中条慧はノアを作る際にそれほど知識を集めていません。精々最低限の知識を使ったでしょう。』

『しかし、なのはさんやフェイトさんの使用するレイジングハートやバルディッシュよりは高性能で分かり易く言うとなのはさん達や管理局の技術のデバイスを第一世代とするとノアは第三世代。私はもはや世代言うなら何百世代と超えていますから。』

そんなにすごかったんだイカロスって・・・作ったの俺だけだよ。

「そっか。じゃ、遠慮なく行こうか。今回も敵サイドで行くよ？いいかな？」

『私はマスターについて行くだけです。』

「ありがとうさん。じゃ、墜とすぜ。あの馬鹿を」

『了解、スナイパーライフル魔力展開。モードβフル稼働開始。』

イカロスの銃口から魔力が装填されていく。カートリッジも連続ロードされる。

『マスターの肉体的負担、最低ライン98%。現在69%・・・80%・・・90%・・・98%！』

『射撃距離・・・15.78km。結界到達まで3.8km。射撃可能です！』

準備はすべて整った。後は当てるだけだね。

「行くよ、イカロス！！モードβの固有技——レーヴァテイン
！！！！」

それはある破壊をもたらす悪魔の妹の技、また北欧神話ではラグナロクで振るわれた最悪をもたらす杖。

その技を模した、しかし劣らない限りない本物と同じく神の領域に入る技

それは結界を障子紙を破るように突き破り、同じく転生者である中条慧に牙をむく。

ス・ ・ ・ ・ ガアアアアアアアアアア！！！！

!!!!!!!!!!!!!!

境界内が真っ赤に光り輝いた。

「ふう……イカロス冷却処理頼む。」

『了解。周囲の温度確認・・・現在温度35度、冷却開始。・・・完了元の温度に低下。さらに自身の冷却開始・・・完了』

「よし・・ていうかかなりのスピードだったよねあれ・・正直俺も引くんだけど?」

『あれは遠距離からでも避けられないように出来る限りスピードと威力を両立させた文字通り一撃必殺の技ですから。』

「うん。あんまり多様出来ないね。じゃ、行こうか。」

そう言つて桜花の向かつた先には壊れていない結界に一人一人が入れるほどの穴があつた。

『はい、マスター。』

それが意味することは、あの攻撃はなのはの様な収束砲撃ではなく、魔力弾の様なものでもなく、まさしく線。

一筋の線が通り、最大限の威力で相手を破壊する技ということだ。

そんなことを軽々やってのけた桜花は飄々とした雰囲気で結界内に入つて行つた。

桜花君の勘違いと蒐集活動（後書き）

さて・・・中条君大丈夫かな？・・・このさき生き残らせる予定なんだけど・・・技を持ち上げすぎたせいで生き残らせる方法が思いつかないぞ・・・！！？どうしよう！！？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6384z/>

世界を周るは転生者(チート)inリリカルなのは

2012年1月9日21時52分発行